

『琉球入学見聞録』における寄語の対音

丁, 鋒

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

92

(発行年 / Year)

1998-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012579>

『琉球入学見聞録』における寄語の対音

丁 鋒

凡例：

一、本文の主旨について

『琉球入学見聞録』の「土音」及びほかの部分に散見された寄語漢字音表記の発音を解説する。十八世紀の沖縄音記資料と現代首里方言資料を引用し、十八世紀の北京音と現代湖南安郷方言発音を取り入れ、中琉対音を再構する。

二、『琉球入学見聞録』について

『琉球入学見聞録』は清乾隆年間國子監琉球官学（國子監に設置された琉球国官費留学生に教育を施行する機構）教習潘相が編撰した琉球の研究書。全書的内容は琉球に出使した冊封使の使録〔主に徐葆光『中山伝信録』（721）と周煌『琉球國志』（1756）〕とほかの琉球関係の史書などを参照した上、作者が四年間指導していた琉球入学生鄭孝徳、蔡世昌（二人とも久米村人）に「逐條覆問」（一項目一項目聞いて調べ合わせる）してから「所見所聞」を記したものである。従って、「入学」、「見聞」を書名にした。全書は四巻に分け、序文によると、1764年（乾隆二十九年）に出版された。

潘相の出身地は中国南部の湖南省安郷県、乾隆六年貢生に選拔され、二十三年武英殿校書となり、二十五年前から二十九年教習を担当、その間に郷試・会試に及第する。以後、山東福山県知県、曲阜県知県、濮州知州を歴任、壽年七十八歳。著書は豊富で、『琉球入学見聞録』以外に『安郷県志・文籍』によると『周易尊翼』、『尚書可解輯粹』、『毛詩古音參義』、『周禮撮要』、『禮記釐編』、『春秋尊孟』、『春秋比事考義』、『春秋應舉輯要』、『禮志舉要』、『曲阜県志』、『欒文書屋集略』などが有る。

『琉球入学見聞録』巻二の「土音」を始め、「字母」と各巻に散見した言葉など全部400余の琉球寄語、47仮名の琉球発音と中国の古典『大学』、『論語』の訓読600余の音節が漢字で表記されている。これらの寄語について「土音」の最後に「以上は皆な入学官生などが毎日口に言い、手で書くもので、徐葆光の『中山伝信録』と異なるのが多い」と説明している。

三、参考資料について

琉球音は『琉球入学見聞録』に時代最も近いローマ字音記資料『クリフォード琉球語』（勉誠社文庫71 亀井孝解説、1979 文中に「琉球語彙」と略称）（原作『A Vocabulary of the Loo-choo Language』H.J.Clifford 1818年）と『沖縄語辞典』（1975年）を主に参考にした以外、『浦添・小湾方言辞典』（1995年）、『沖縄対話（1880年）』、『琉球語便覧』（1916年）な

ども参照する。対音の琉球音部分とその日本語表記は基本的に『沖縄語辞典』によるものである。

中国語の発音は清代官話標準音の北京音を中心とし、『李氏音鑑』（李汝珍 1785年）、『音韻逢源』（裕恩 1840年）の音系を参考にする。『琉球入学見聞録』の作者潘相の出身地湖南安郷県は中国北方方言の南西官話区内にあたる。安郷方言は主に『湖南安郷方言』（應雨田 1994年）を引用する。

ほかに、『日本祖語について（1－20）』（服部四郎）、『琉球方言音韻の研究』（中本正智 1976年）、『琉球館訳語・使琉球録・音韻字海・琉球入学見聞録・中山伝信録寄語対照手冊』（坂井健一 1975年）、『「琉球入学見聞録」土音の音訳字』（多和田真一郎 『琉球の方言』第20号 1995年）、『クリフォード琉球語彙 琉英配列語彙』（多和田真一郎 『琉球の方言』第9号 1984年）、『「沖縄対話」単語編・比較研究』（伊波和正 『琉球の方言』21号 1996年）、『琉漢対音與明代官話音研究』（丁鋒 1995年）、『明清使録所記琉球語言文字』（丁鋒 語苑挿英一慶祝唐作藩教授七十寿辰學術論文集所収 北京語言文化大学出版社 1998年1月）、『「琉球訳」における琉球地名の対音解説』（丁鋒 『琉球の方言』21号 1996年）、『琉球入学見聞録』（近代中国史料叢刊第九十二輯に所収初版の影印本 文海出版社 刊刻年未詳）、『安郷県志』（民国王燦編纂 民国二十五年手抄本による影印本 中国方志叢書華中地方第305號 成文出版社）などを参考にした。

四、音声について

中琉対音は国際音声符号で統一する。各項目 $\longleftrightarrow$ の前後の〔 〕内は十八・十九世紀の北京官話音と琉球資料による解読音である。安郷方言音に関する説明は項目の下に有る。引用した音記の後ろの（ ）内に「＝」（同じ）、「 $\leftarrow$ 」（～から変化してきた）、「 $\rightarrow$ 」（～へ変化してゆく）の後ろは国際音声符号である。

『琉球入学見聞録』における寄語の琉中对音法則は主に以下（前中後琉）である。

(一) 子音：

$m \longleftrightarrow m$ $n \longleftrightarrow n$ $l \longleftrightarrow r$ $x \longleftrightarrow h$ $f \longleftrightarrow \Phi$

$ts, ts' \text{（'有気音記号）} \longleftrightarrow ts, dzi$ $s \longleftrightarrow s, z$

$t\phi, t\phi', ts, ts' \longleftrightarrow t\phi, dzi$ $\phi, \phi \longleftrightarrow f$ $z \longleftrightarrow dzi$ $p, p' \longleftrightarrow b, p$ $k, k' \longleftrightarrow k, g$

零子音 $\longleftrightarrow ?$ 、零子音

(二) 母音

$a \longleftrightarrow a, a:$ $e, \gamma \longleftrightarrow e, e:$ $i \longleftrightarrow j, i, i:, i\#$ $u \longleftrightarrow w, u, u:, i\#$

$o \longleftrightarrow o, o:$ $au \longleftrightarrow o:$ $i\#u \longleftrightarrow iu$

(三) 韻尾（子音音尾）

$-n, -\eta \longleftrightarrow -N \text{（}-m, -n, -\eta\text{）}$ 無対応（入聲） $\longleftrightarrow -?$ （促音）

対音の中国語の主要特徴は：

1. 中国語発音は北京音を中心としながら、安郷方言音の影響も受けている。
2. 齊齒呼 (-i, -i-) と撮口呼 (-iɥ, -y) の前の舌根音 [k, k', x] の口蓋化 (それぞれ tɕ, tɕ', ɕ になる) は既に発生したが全面一律に広がっていない。齊齒呼と撮口呼の前の齒茎前音 (ts, ts', s) の口蓋化 (それぞれ tʃ, tʃ', ʃ になる) は始まっていない。
3. 撮口呼の漢字が多く琉球の iu と対音する現象から見ると、それらの音は -iu から -iɥ を経て -y へ変化する途中で、-y より -iɥ の方が一般的である。
4. 『廣韻』時代の果摂舒声字 (平、上、去声字と一部分宕、梗、咸攝入声字の韻母は現代に -ɤ と読むが、『琉球入学見聞録』にまだ o と読む。

5. 哈、喀、挨は「k'a, k'a, iai」と発音する。

琉球 (首里) 音の特徴は：

1. 三母音システムが定着した。
2. き、ぎは口蓋化した。
3. み→-N, ɲ→i, た→tʃia の変化は発生した。
4. 一部分の音節は新旧両音が併存する。
5. 一部分タ行、サ行子音は貴族・士族発音と平民発音の区別が有する。

〈1〉 土 音

一、天文類

1. 天 廳 [t'ij] ↔ [tiN (天)]

安郷方言に「廳 t'in」と読む。琉球語彙に「heavens Ting」とある。沖縄語辞典に「天 tiN」とある。

2. 日 虚 [ɕiɥ] ↔ [Φoi: (日)]

沖縄語辞典に「日 huoi」とある。

3. 月 此吉 [ts'ʔ tɕi] ↔ [tsitʃi (月)]

琉球語彙に「moon month Stichee」とあり、ツキのキは既に口蓋化した。沖縄語辞典に「月 ɕici (ɕi=tsi ci=tʃi) とある。

4. 星 弗失 [fuʃl] ↔ [Φuʃi (星)]

琉球語彙に「stars Fooshee」とある。沖縄語辞典に「星 husi (hu=Φu si=ʃi) とある。

5. 風 哈子 [k'atsʔ] ↔ [kadzi (風)]

北京官話と安郷方言は「哈」をともに「xa」と読み、「哈」を [k'a] と読む各地方言も調べる限りに無い。琉球入学見聞録に「哈」が22回対音し、その中「カ」と18回、「ガ、カウ、ガウ、ハ」とそれぞれ1回になっている。沖縄方言にカ行音が h になる例が偶に有る (『琉球方言音韻の研究』P 392) が、こんなに数多くの語彙は一斉に

音変したことが考えにくい。この現象は発音者の個人習慣だか、それとも中国語にある又音だか、また研究が必要である。沖縄語辞典に「風 kazi」(zi=dʒi←dzi) とある。

6. 雨 阿霉 [amei] ↔ [ʔami (雨)]

琉球語彙に「rain Amee」とある。沖縄語辞典に「雨 ʔami」とある。

7. 雷 堪理 [k'anli] ↔ [kaNnai (雷)]

琉球館訳語に「雷 刊毎那立」(k'amuinali)、中山伝信録に「雷 喀叻渺一」[k'ammiaui] (渺は那 (na) の誤字だと思われる) とある。kaminari から kannai (mi→N ri→i) になった音韻変化は首里方音に少なくとも琉球入学見聞録以前の中山伝信録 (1721) 時代に完成した。安郷方言に n と l の区別がなく (自由変読)、n (nai) を l (li) で対音したのは恐らく潘相のお国なまりの発音によるものであろう。沖縄語辞典に「雷 kaNnai」とある。

8. 雲 窟木 [k'umu] ↔ [kumu (雲)]

琉球語彙に「clouds koomoo」とある。沖縄語辞典に「雲 kumu」とある。

9. 雪 欲吉 [iʉtɕi] ↔ [iutʃi (雪)]

沖縄語辞典に「雪 juci」(ci=tʃi) とある。

10. 電 福禮 [fuli] ↔ [Φudi: (稲妻)]

d を l と対音したのは、破裂音を側音のように聞き間違えたと思われる。沖縄語辞典に「稲妻 hudii」(hu=Φu) とある。

11. 霜 失木 [sɿmu] ↔ [ʃimu (霜)]

沖縄語辞典に「霜 simu」(si=ʃi) とある。

12. 下雨 阿霉福的 [ameifuti] ↔ [ʔamiΦuʔti (雨降って)]

琉球語彙に「to rain Amee fooyoong」とある。

13. 下雪 欲吉福的 [iʉtɕifuti] ↔ [iutʃiΦuʔti (雪降って)]

14. 霧 哈絲蜜 [kasʔmi] ↔ [kasimi (霞)]

霧のことに霞の発音を表記した。日葡辞書に「霞 casumi」(ca=ka) とある。

15. 露 七欲 [ts'iiu] ↔ [tsiiu (露)]

沖縄語辞典に「露 ɕiju」(ɕi=tsi) とある。

16. 霞 噶喀泥 [k'ak'ani] ↔ [kogani (こがね)]

「こがね」は朝焼けの色或いは朝日の出る光景のことを指す。『琉球の方言』20号 (『琉球館訳語解説文(一)』) P89の説明を参照する。

17. 電 阿那禮 [anali] ↔ [ʔarari (霰)]

ra を na で対音したのは方言音によるものであろう。沖縄対話に「霰 アラリ (arari)」とある。

18. 明日 阿雜 [atsa] ↔ [atʃia (明日)]

琉球語彙に「tomorrow Acha」とある。沖縄語辞典に「明日 ʔaca」(ca=tʃia)とある。

19. 起風 噶子弗吉 [k'atsʔfutʃi] ↔ [kaziΦutʃi (風吹き)]

20. 天陰 廳窟木的 [t'ɪŋk'umuti] ↔ [tiNkumuʔti (天曇って)]

21. 天晴 廳花力的 [t'ɪŋxualiti] ↔ [tiNhariti (天晴れて)]

22. 天河 廳哈阿拉 [t'ɪŋk'aala] ↔ [tiNgaara (天河原)]

沖縄語辞典に「銀河 tiNgaara」とある。

23. 後日 阿撒的 [asati] ↔ [ʔasati (明後日)]

琉球語彙に「day after tomorrow Asattee」とある。沖縄語辞典に「明後日 ʔasati」とある。

24. 大後日 欲哈阿撒的 [iɛk'aasati] ↔ [iuʔkaasati (四日明後日)]。

二、地理類

25. 地 齒 [tʃ'ɪ] ↔ [dʒii (地)]

琉球語彙に「the earth Jee」とある。沖縄語辞典に「地 zii」(zii=dʒii)とある。

26. 土 齒至 [tʃ'ɪltʃɪ] ↔ [tsitʃi (土)]

安郷方言の「齒」は ts'ʔ と読む。

27. 山 牙嗎 [iama] ↔ [iama (山)]

琉球語彙に「path Yamana meetchee」(山の道)とある。沖縄語辞典に「山 jama」とある。

28. 川 哈哇 [k'aua] ↔ [kaua (川)]

日葡辞書に「川 kaua」とある。

29. 江 哈哇辣 [k'auara] ↔ [kauara (河原)]

沖縄語辞典に「川 kaara」(a←ua)とある。

30. 河 哈哇 [k'aua] ↔ [kaua (川)]

28と同じである。

31. 海 勿蜜 [umi] ↔ [ʔumi (海)]

琉球語彙に「see Oomee」とある。沖縄語辞典に「海 ʔumi」とある。

32. 水 媚吉 [meitʃi] ↔ [midʒi (水)]

琉球語彙に「water Meezee」とある。対音字「吉」は既に口蓋化した。沖縄語辞典に「水 mizi」(ʒi=dʒi)とある。

33. 冰 庫兀利 [k'uuli] ↔ [kuuri (冰)]

沖縄語辞典に「冰 kuuri」とある。

34. 路 蜜至 [mitʃɿ] ↔ [mitʃi (道)]

琉球語彙に「road Meechee」とある。沖縄語辞典に「道 mici」(ci=tʃi)とある。

35. 岸 倭喀 [uok'a] ↔ [uoka (岡)]

日葡辞書に「岡 oka」とある。

36. 石 伊石 [iʃɿ] ↔ [ʔifi (石)]

琉球語彙に「stone ishee」とある。沖縄語辞典に「石 ʔisi」(si=ʃi)とある。

37. 井 喀 [k'a] ↔ [ka: (井戸)]

琉球語彙に「Well Meezee ka」とある。沖縄語辞典に「井戸 kaa」とある。

38. 泥 毒露 [tulu] ↔ [duru (泥)]

琉球語彙に「mud dooroo」とある。沖縄語辞典に「泥 duru」とある。

39. 沙 息拉 [sila] ↔ [sina (砂)]

琉球語彙に「sand sinna」とある。「拉」で na を対音するのは、方言の影響であろう。沖縄語辞典に「沙 ʃina」(ʃi=si)とある。

40. 灰 懷 [xuai] ↔ [huai (灰)]

沖縄語辞典と沖縄対話には「灰 hwee」とあり、対音字「懷」の発音から見ると、『琉球入学見聞録』時代には母音まだ「uai」と読み、「uee」ではなかった。

41. 磚 十吉哈拉 [ʃɿltʃik'ala] ↔ [ʃitʃigaara (敷瓦)]

沖縄語辞典に「煉瓦 sicigaara」(si=ʃi ci=tʃi)とある。

42. 瓦 喀辣 [k'ala] ↔ [kaara (瓦)]

沖縄語辞典に「瓦 kaara」とある。

43. 遠 徒撒 [t'usa] ↔ [tu:sa (遠さ)]

沖縄語辞典に「遠い tuusaN」とある。

44. 近 恥喀撒 [tʃɿk'asa] ↔ [tʃikasa (近さ)]

沖縄語辞典に「近い cicasaN」(ci=tʃi ca=tʃia←ka)とある。

45. 長 那喀撒 [nak'asa] ↔ [nagasa (長さ)]

琉球語彙に「Long or lenght Nagasa」とある。沖縄語辞典に「長い nagasaN」とある。

46. 短 因夾撒 [intʃiasa] ↔ [ʔiNtʃiasa (短さ)]

琉球語彙に「short injasa」とある。沖縄語辞典に「短い ʔiNcasaN」(ca=tʃia)とある。

47. 前 麥 [mai] ↔ [mai (前)]

「前」の発音は maie→mai→mee (沖縄語辞典) の順序で変化してきた。「麥」の発音から見ると漢字音は第二段階に当る。

48. 後 窟使 [k'uʃɿ] ↔ [kuʃi (後)]

沖縄語辞典に「後 kusi」(si=ʃi) とある。

49. 左 虚答歴 [çiɹɹali] ↔ [hwiɹari (左)]

琉球語彙に「Left Feejeeree」とある。沖縄語辞典に「左 hwizai」(za=dʒia←da i←ri) とある。

50. 右 蜜吉歴 [mitçili] ↔ [midʒiri (右)]

琉球語彙に「right Meejeree」とある。第二音節の子音が口蓋化した。沖縄語辞典に「右 miziri」(zi=dʒi) とある。

51. 上 哈蜜 [k'ami] ↔ [kami (上)]

沖縄語辞典に「上 kami」とある。

52. 下 使木 [tɕɹɹmu] ↔ [ʃimu (下)]

沖縄語辞典に「下 simu」(si=ʃi) とある。

53. 東 熏喀失 [çiɹɹɹnk'asɹɹ] ↔ [ΦiNgaʃi (東)]

沖縄語辞典に「東 hwigasi」(si=ʃi) とある。

琉球語彙に「east Fingassee」とある。第二音節濁子音 g の影響を受け、第一音節の音尾に添音-N がある。

54. 西 逆失 [niɹɹɹ] ↔ [niʃi (西)]

琉球語彙に「west Neeshee」とある。沖縄語辞典に「西 nisi」(si=ʃi) とある。

55. 南 閩南蜜 [minnanmi] ↔ [miNnaNmi (南)]

琉球語彙に「South Minami」とある。対音字から見ると、第二、第三音節の音尾にそれぞれ添音-N がある。

56. 北 及答 [tçita] ↔ [tʃita (北)]

琉球語彙に「north cheeta」とある。第一音節の ki は既に口蓋化して「tʃi」と読む。

57. 府 麻吉利 [matçili] ↔ [madʒiri (間切)]

沖縄語辞典に「間切 maziri」(zi=dʒi) とある。

58. 村 母拉 [mula] ↔ [mura (村)]

沖縄語辞典に「村 mura」とある。

59. 州 收 [səu] ↔ [ʃiu: (州)]

沖縄語辞典に「州 siu:」(siu:=ʃiu:) とある。

60. 里 撒毒 [satu] ↔ [satu (里)]

沖縄語辞典に「里 satu」とある。

61. 橋 花失 [xuasɹɹ] ↔ [haʃi (橋)]

琉球語彙に「bridge Hashee」とある。沖縄語辞典に「橋 hasi」(si=ʃi) とある。

62. 過水 蜜子哇答已 [mits²uatas²] ↔ [midʒiuatasi (水渡す)] 32條「水 媚吉

(meitçi)と違い、ここに「水 蜜子 [mitsʔ] である。第二音節は dzi から dʒi への変化中、二音が共存していることが思われる。

63. 行船 混利酷兀已 [xuənlik'uusʔ] ↔ [huNnikuusi (船航す)]

琉球語彙に「large ship Hooboone or wesara hoonee」とある。第二音節 n-の影響で第一音節の音尾に添音-Nが有る。「利」で ni を対音するのは方言音だろう。

64. 渡 混利哇搭已 [xuənliuatasʔ] ↔ [huNniuatasi (船渡す)]

65. 琉球地 屋其惹 [utç'iʒɛ] ↔ [utʃinaa (沖縄)]

琉球館訳語に「琉球人 倭及奴必周」(琉球: 倭及奴 uokinu)、陳侃使琉球録(1579)に「琉球人 倭急拿必周、(琉球: 倭急拿 uokina)、中山伝信録に「沖縄 屋其惹」とある。琉球入学見聞録にこの項目のほかに、「琉球 烏吉逆呀 [utç'iniia] ともある。「沖縄」の「縄」の読み方は歴史上に naua、naa 以外に「nia」も存在したことが考えられる。沖縄語辞典に「沖縄 ʔuciinaa」(ci=tʃi) とある。

66. 巴麻 讀間

「中山伝信録・琉球三十六島」に「巴麻」は「沖縄では間をマと発音する。『ま』は島のことである。」と注釈した。(原文は「中山讀間字音、同麻、華言山也。」)。

「東四島」には「巴麻、訳して浜島とする。」とある。「西南九島にも「烏巴麻 小浜」とある。巴麻は浜島の発音「bama」である。讀間」は「間と読む」の意味で、実に中山伝信録から写し間違えたもので「巴麻」の音記ではない。

67. 泊 土馬爺 [t'umaie] ↔ [tumai]

第三音節の i と ie ズレが有る。沖縄語辞典に「泊 tumai」とある。

68. 辻 失汁 [ʃltsɿ] ↔ [tsi: dʒi (辻)]

『球雅』(1800)に「迭(「辻」の誤字) 山 即日 (tçizɿ) とある。沖縄語辞典に「辻 çiiʒi」(çi=tsi zi=dʒi) とある。

69. 久米 苦念搭 [k'unienta] ↔ [kuniNda (久米)]

沖縄語辞典に「久米 kuniNda」とある。

70. 喜屋武 腔 [tç'iaŋ] ↔ [tʃiaN (喜屋武)]

沖縄語辞典に「喜屋武 caN」(ca=tʃia) とある。

三、時令類

71. 春 花魯 [xualu] ↔ [haru (春)]

沖縄語辞典に「春 haru」とある。

72. 夏 那即 [natsi] ↔ [natsi (夏)]

沖縄語辞典に「夏 naçi」(çi=tsi) とある。

73. 秋 阿即 [atç'i] ↔ [ʔatʃi (秋)]

沖縄語辞典に「秋 ʔatʃi (ci=tʃi) とある。

74. 冬 弗欲 [fuiɬ] ↔ [Φuiu (冬)]

沖縄語辞典に「冬 huju」とある。

75. 冷 灰撒 [xueisa] ↔ [hwi:sa (冷さ)]

琉球語彙に「cold feesa」とある。沖縄語辞典に「寒い hwisaN」とある。

76. 熱 阿子撒 [atsʔsa] ↔ [ʔatsisa (暑さ)]

琉球語彙に「hot warm Ateesa」、「hot water Atsee meezee or atcheeroo」とある。沖縄語辞典に「熱い ʔaɕisaN (çi=tsi) とある。

77. 陰 因 [in] ↔ [ʔiN (陰)]

78. 陽 葉 [io] ↔ [io: (陽)]

「葉」の発音は安郷方言で io と読み、北京官話で io (読書音) と iau (口語音) と読む。

79. 晝 虚魯 [çiɬlu] ↔ [huiru (昼)]

琉球語彙に「daylight Heeroo」とある。沖縄語辞典に「昼 hwiru」とある。

80. 夜 攸陸 [iulu] ↔ [iuru (夜)]

琉球語彙に「night Yooroo」とある。沖縄語辞典に「夜 juru」とある。

81. 朝 阿撒 [asa] ↔ [ʔasa (朝)]

琉球語彙に「meal 2nd (two hours after) Assabung」(朝飯) とある。沖縄語辞典に「朝 ʔasa」とある。

82. 晚 邦 [baɣ] ↔ [baN (晩)]

83. 時 土吉 [tʰutçi] ↔ [tutʃi (時)]

琉球語彙に「hour Twitchee」とある。第二音節「吉」は口蓋化した。沖縄語辞典に「時 tuci (ci=tʃi) とある。

84. 氣 其 [tç'i] ↔ [tʃi: (氣)]

沖縄語辞典に「氣 cii (ci=tʃi) とある。

85. 年 土失 [tʰuʃl] ↔ [tuʃi (年)]

沖縄語辞典に「年 tusi (si=ʃi) とある。

86. 節 失子 [ʃltsʔ] ↔ [ʃitsi (節)]

沖縄語辞典に「節 siçii (si=ʃi çi=tsi) とある。

87. 正月 芍倭刮止 [ʃioukuatʃl] ↔ [ʃio:guatsi (正月)]

北京官話に「芍」の口語音は「sau」である。安郷方言に「止」は「tsʔ」と読む。87から98まで12項目の「止」は全部 tsʔ と対音、安郷方言の影響あるかもしれない。琉球語彙に「January Shawgwautsee」とある。沖縄語辞典に「正月 sjoogwaçi (sj=ʃi çi=tsi)」とある。

88. 二月 膩刮止 [nikuatʂɿ] ↔ [niguatʂi (二月)]

琉球語彙に「Februry Neegwautsee」とある。沖縄語辞典に「二月 nigwaç (ç=ts) とある。

89. 三月 三刮止 [sankuatʂɿ] ↔ [saNguatʂi (三月)]

琉球語彙に「March sang gwautsee」とある。沖縄語辞典に「三月 saNgwaci (çi=tsi) とある。

90. 四月 失刮止 [ʂɿkkuatʂɿ] ↔ [ʂiguatʂi (四月)]

琉球語彙に「April sheegwautsee」とある。沖縄語辞典に「四月 sigwaçi (si=ʂi çi=tsi) とある。

91. 五月 共刮止 [kuŋkuatʂɿ] ↔ [guNguatʂi (五月)]

対音字から見ると、第二音節濁子音 g-の影響で、第一音節の末に添音-Nがある。琉球語彙に「May Googwautsee」とある。沖縄語辞典に「五月 gugwaçi (çi=tsi) とある。

92. 六月 六骨刮止 [liukukuatʂɿ] ↔ [rukugwatʂi (六月)]

安郷方言に「六」を lou と読む。琉球語彙に「June Roocoogwautsee」とある。沖縄語辞典に「六月 rukugwaçi (çi=tsi) とある。

93. 七月 失止刮止 [ʂɿtʂɿkkuatʂɿ] ↔ [ʂitʂiguatʂi (七月)]

琉球語彙に「July Sitcheegwautsee」とある。沖縄語辞典に「七月 sicigwaçi (si=ʂi ci=cʂi çi=tsi) とある。

94. 八月 瞎知刮止 [çiatʂɿkkuatʂɿ] ↔ [hatʂiguatʂi (八月)]

首里語の発音から見ると、第一音節の子音は軟口蓋音である。対音字「瞎」の発音は中古から「xa→XIa→xia→çia」のように変化して来たことから見ると、「xia」と読むかもしれない。琉球語彙に「August Fatcheegwautsee」とある。沖縄語辞典に「八月 hacigwaçi (çi=tsi) とある。

95. 九月 空刮止 [k'ugkuatʂɿ] ↔ [kuNguatʂi (九月)]

対音字から見ると、第二音節の子音 g-の影響で、第一音節の音尾に添音-Nがある。琉球語彙に「September Coogwautsee」とある。沖縄語辞典に「九月 kugwaçi (çi=tsi) とある。

96. 十月 磨刮止 [ziɰkuatʂɿ] ↔ [dʒiu: guatʂi (十月)]

琉球語彙に「October Joogwautsee」とある。沖縄語辞典に「十月 zuugwaçi (çi=tsi) とある。

97. 十一月 磨亦止刮止 [ziɰitʂɿkkuatʂɿ] ↔ [dʒiu: itʂiguatʂi (十一月)]

琉球語彙に「November Jooitchee gwautsee」とある。沖縄語辞典に「十一月 zuuicigwaçi (ci=tʂi çi=tsi) とある。

98. 十二月 蔘膩刮止 [ziɪnikuatsɿ] ↔ [dʒiu: niguatsi (十二月)]

琉球語彙に「December Jooneegautsee」とある。

99. 初一 之搭之 [tʂɿtatsɿ] ↔ [tsiitatʃi (一日)]

琉球語彙に「Names of the Days of the Moon from New to Full」に一日から十五日の読方がある。その中に第一日めは「chee tatchee」とある。沖縄語辞典と違って、「tsii」と読まなく、chee (tʃi) と読み、対音字「之」の発音 [tʂɿ] に近い。ツをチと読むのは貴族・士族の発音特徴であり、以上十二ヶ月の「ガツ」の「ツ」を「止」で対音したのも恐らく同じなことだろう。沖縄語辞典に「朔、一日 ciitaci」(ci=tʃi ci=tʃi) とある。

100. 初二 福子憂 [futsʰka] ↔ [Φutsika (二日)]

沖縄語辞典に「二日 hucika」(hu=Φu ci=tʃi←tsi) とある。

101. 初三 之搭之密憂 [tʂɿtatsɿmika] ↔ [tsiitatʃimika (朔三日)]

沖縄語辞典に「三日 miQka」とある。

102. 初四 之搭之嗜喀 [tʂɿtatsɿliuka] ↔ [tsiitatʃiɪʰka (朔四日)]

沖縄語辞典に「四日 juQka」とある。

103. 初五 之搭之一子憂 [tʂɿtatsɿlitsʰka] ↔ [tsiitatʃiitsika (朔五日)]

104. 初六 之搭之美憂 [tʂɿtatsɿmuika] ↔ [tsiitatʃimuika (朔六日)]

対音字「美」と「梅」は中古から muqi→muei→mei のように変化した。明清時代には muei から mei になる段階である。琉球入学見聞録に美はメ (三回)、ミ (一回)、ムイ (一回) と対音、梅はメ (一回)、ミ (一回) と対音した。七回の対音に六回が mei、一回だけが muei であることを考えれば、muei の発音より mei の方が一般的であろう。

105. 初七 之搭之南喀 [tʂɿtatsɿnank'a] ↔ [tsiitatʃinanoka (朔七日)]

対音字「南」は nano の合音である。

106. 初八 之搭之約喀 [tʂɿtatsɿlioka'] ↔ [tsiitatʃio: ka (朔八日)]

安郷方言に「約」は io と読み、北京音は yo、yɛ、iau と発音する。琉球語彙に「yooka (八日)」がある。

107. 初九 之搭之酷古盧喀 [tʂɿtatsɿk'ukuluk'a] ↔ [tsiitatʃikukunuka (朔九日)]

nu を lu (盧) で対音するのは方言音によるものだと考えられる。

108. 初十 之搭之突喀 [tʂɿtatsɿtuk'a] ↔ [tsiitatʃitu: ka (朔十日)]

沖縄語辞典に「十日 tuka」とある。

109. 十一 蔘亦之泥止 [ziɪitsɿnitsɿ] ↔ [dʒiu: itʃinitʃi (十一日)]

琉球語彙に「Jooitchee nitchee (十一日)」とある。

110. 十二 蔘膩泥止 [ziɪninitʃɿ] ↔ [dʒiu: ninitʃi (十二日)]

- 琉球語彙に「Jooneenitchee (十二日)」とある。
111. 十三 蔘三泥止 [zi~~u~~sannitʃl] ↔ [dʒiu: sannitʃi (十三日)]
 琉球語彙に「Joosannitchee (十三日)」とある。
112. 十四 蔘育喀 [zi~~u~~i~~u~~k'a] ↔ [dʒiu: iuka (十四日)]
 琉球語彙に「Jooyooka (十四日)」とある。
113. 十五 蔘古泥止 [zi~~u~~kunitʃl] ↔ [dʒiu: kunitʃi (十五日)]
 琉球語彙に「Joogoonitchee (十五日)」とある。
114. 十六 蔘魯古泥止 [zi~~u~~lukunitʃl] ↔ [dʒiu: rukunitʃi (十六日)]
 沖縄語辞典に「十六 zuuruku」(zuu=dʒiu:) とある。
115. 十七 蔘十之泥止 [zi~~u~~sʌtʃʌnitʃl] ↔ [dʒiu: ʃitʃinitʃi (十七日)]
 沖縄語辞典に「十七 zuusici」(si=ʃi ci=tʃi) とある。
116. 十八 蔘滑之泥止 [zi~~u~~xuatʃʌnitʃl] ↔ [dʒiu: hatʃinitʃi (十八日)]
 沖縄語辞典に「十八 zuuhaci」(ci=tʃi) とある。
117. 十九 蔘酷泥止 [zi~~u~~kunitʃl] ↔ [dʒiu: kunitʃi (十九日)]
 沖縄語辞典に「十九 zuuku」 とある。
118. 二十 瞎子喀 [ɸiatsʰk'a] ↔ [hatsika (二十日)]
 琉球音からみると、「瞎」は、口蓋化した前の「xia」と読むべきである(94を参照)。沖縄語辞典に「二十日 haçika」(çi=tsi) とある。
119. 二十一 瞎子喀止 [ɸiatsʰk'atʃl] ↔ [hatsikaitʃi (二十一日)]
 「瞎」の発音は118と同じである。「イチ (一)」のイに対応する対音字が無い。
120. 二十二 泥肉泥泥止 [nizi~~u~~ninitʃl] ↔ [nidʒiu: ninitʃi (二十二日)]
 沖縄語辞典に「二十 nizuu」(zuu=dʒiu:) とある。
121. 二十三 泥蔘三泥止 [nizi~~u~~sannitʃl] ↔ [nidʒiu: saNnitʃi (二十三日)]
 琉球語彙に「Sannitchee (三日)」とある。
122. 二十四 泥蔘蔘喀 [nizi~~u~~zi~~u~~ka] ↔ [nidʒiu: iuʰka (二十四日)]
 二番目の「蔘」は誤字だと考えられる。102、112は噲 (i~~u~~)、育 (i~~u~~) となっている。
123. 泥蔘古泥止 [nizi~~u~~kunitʃl] ↔ [nidʒiu: gunitʃi (二十五日)]
 琉球語彙に「goonitchee (五日)」とある。沖縄語辞典に「五日 gunici」(ci=tʃi) とある。
124. 二十六 泥蔘魯古泥止 [nizi~~u~~lukunitʃl] ↔ [nidʒiu: lukunitʃi (二十六日)]
 沖縄語辞典に「六日 rukunici」(ci=tʃi) とある。
125. 二十七 膩蔘失止泥止 [nizi~~u~~sʌtʃʌnitʃl] ↔ [nidʒiu: ʃitʃinitʃi (二十七日)]
 琉球語彙に「sitchee nitchee (七日)」とある。沖縄語辞典に「七日 sicinici」(si

=fi ci=ɸi) とある。

126. 二十八 泥蔦滑止泥止 [niziɸxuatsɿnitsɿ] ↔ [nidgiu: hatɸinitɿ (二十八日)]
琉球語彙に「fatchee nitchee (八日)」とある。沖縄語辞典に「八日 hacinici」
(ci=ɸi) とある。
127. 二十九 膩蔦酷泥止 [niziɸkunitsɿ] ↔ [nidgiu: knnitɿ (二十九日)]
琉球語彙に「coonitchee (九日)」とある。
128. 三蔦泥止 [sanziɸnitsɿ] ↔ [saNdgiu: nitɿ (三十日)]
沖縄語辞典に「三十 saNzuu」(zuu=dgiu:) とある。

四、人物類

129. 虚毒 [ɸiɸtu] ↔ [Φitu (人)]
沖縄語辞典に「人 hwitu」(hwi=Φi) とある。
130. 唐人 駄樓周虚毒 [tuoloutɸoɸɸiɸtu] ↔ [to: nuʔtɸiu Φitu (唐の人人)]
沖縄語辞典に「中国人 toonuQcu」(Qcu=ʔtɸiu) とある。
131. 大夫 帖夫 [t'iefu] ↔ [de: Φu (大夫)]
132. 長史 察姑事 [ts'akuɿ] ↔ [sakuɸi (册史)]
安郷方言に「察」が「tsa」と読む。沖縄語辞典に「册史 sakusi」(si=ɸi) とある。
133. 通事 吐子 [t'utsʔ] ↔ [tu: dʒi (通事)]
沖縄語辞典に「通事 tuuzi」(zi=dʒi) となる。
134. 正使 芍匙 [ɿiosɿ] ↔ [ɸio: ɸi (正使)]
135. 副使 呼匙 [xuɿ] ↔ [huɸi (副使)]
136. 臣子 聲喀 [ɿəŋk'a] ↔ [fiNka (臣下)]
沖縄語辞典に「臣下 siNka」(si=ɸi) とある。
137. 祖 烏弗首 [ufuɸou] ↔ [ʔu Φuɸiu: (大主)]
沖縄語辞典に「父方の一番上の伯父 ʔuhusjuu」(hu=Φu sj=ɸi) とある。
138. 父 烏杏喀奴屋牙 [uɸiŋk'anuuia] ↔ [uikiNganuuia (父親)]
沖縄語辞典に「父親 wikiganuuja」とある。第二音節子音の ɸ (或いはx) と k はズレが有る。第三音節子音 g-の影響で、第二音節の音尾に添音-N が有る。
139. 母 烏那姑奴烏呀 [unakunuuia] ↔ [uinagunuuia (母親)]
沖縄語辞典に「母親 winagunuʔuja」とある。
140. 兄 西察 [sits'a] ↔ [si: dza (兄)]
沖縄語辞典に「兄 ɿiɿza」(ɿi=si ɿa=dza) とある。安郷方言に「察」は ts'a と読む。

141. 弟 屋毒 [utu] ↔ [ʔuʔtu (弟)]

沖縄語辞典に「弟 ʔuQtu」とある。

142. 子 寡 [kua] ↔ [ʔkua (子)]

琉球語彙に「children qua」とある。沖縄語辞典に「子 Qkua」とある。

143. 女兒 烏那姑寡 [unakukua] ↔ [uinagugua (娘)]

沖縄語彙に「daughter Innago oongua」とある。

沖縄語辞典に「娘 WiNaguNgwa」とある。対音の第三音節に添音-Nが無い。

144. 夫 烏毒 [utu] ↔ [utu (夫)]

沖縄語辞典に「夫 'utu」とある。

145. 妻 吐止 [t'utsɿ] ↔ [tudʒi (妻)]

沖縄語辞典に「妻 tuzi (zi=dʒi)」とある。

146. 婦 嘯美 [iɤmei] ↔ [iumi (嫁)]

沖縄語辞典に「嫁 jumi」とある。

147. 孫 烏麻喀 [umak'a] ↔ [umaga (孫)]

沖縄語辞典に「孫 ʔNmaga」(ʔN←u←o)とある。

148. 朋友 盧失 [lusɿ] ↔ [dufi (友達)]

対音は破裂音のdを側音のlに誤った。中山伝信録は「朋友 獨需」(tuɕy)とある。琉球語彙に「friend Eedooshee」とある。沖縄語辞典に「友達 dusi」(si=ʃi)とある。

149. 你 呀 [ia] ↔ [ʔia: (お前)]

琉球語彙に「you Ya」とある。沖縄語辞典に「お前 ʔjaa」とある。

150. 我 往 [uaŋ] ↔ [uaN (私)]

琉球語彙に「I Wang」とある。沖縄語辞典に「私 WaN」とある。

151. 男 烏吉喀 [utɕik'a] ↔ [uikiko (男)]

琉球音から見ると、対音字の「吉」は未だ口蓋化していない。琉球語彙に「A man ickkeega」とある。沖縄語辞典に「男 wikiga」とある。

152. 女 烏那姑 [unagu] ↔ [uinagu (女)]

琉球語彙に「A woman Innago」とある。沖縄語辞典に「女 winagu」とある。
138父、139母、143女兒、151男、152女など全部五項目の第一音節には、琉球入学見聞録が「烏(u)」で対音、沖縄語辞典の「wi(ui)」とやや違う。中山伝信録に以上の所が全部「會」で対音、沖縄語辞典に合う。

153. 親戚 喂街 [ueitɕiɛ] ↔ [ʔue: ka (親戚)]

琉球音第二音節から見ると、対音字「街」は未だ口蓋化以前のkiɛ 或いはkiaと読むべきである。琉球語彙に「brother weekee」とある。沖縄語辞典に「親戚

ʔweeka」とある。

154. 姉 姑西察烏乃 [kusitʃ'aunai] ↔ [ʔusi: dzaunai (お姉)]

琉球語彙に「sister onigh (onai)」とある。沖縄語辞典に「姉 šiiz̄aunai」(ʃi=si ʒa=dza)、また「御 (敬語接頭辞) ʔu」とある。対音字「姑」の子音「k」が「ʔ」と対音する。

155. 妹 屋毒烏乃 [utuunai] ↔ [ʔuʔtuunai (妹)]

沖縄語辞典に「妹 ʔuQtuunai」とある。

156. 伯 洗察渾局 [sitʃ'axuntʃiɸ] ↔ [si: dzauNtʃiu: (伯父)]

沖縄語辞典に「伯父 uNcuu」(cuu=tʃiu:) とある。琉球語の方は「兄の叔父」の発音である。

157. 叔 屋多渾局 [utuoxuntʃiɸ] ↔ [ʔu'tuuNtʃiu: (叔父)]

琉球語の方は「弟の叔父」の音である。141弟はこの「屋多 (tuo)」と違って、「屋毒 (tu)」で対音した。中山伝信録にも「叔 屋多渾局」とあって、「多」は呉方言で「tu」と読む。この項目は中山伝信録の影響を受けたかもしれない。

158. 姪 威 [uei] ↔ [ui: (甥)]

沖縄語辞典に「甥 wii」とある。

159. 小孩子 哇辣比 [ualapi] ↔ [uarabi (童)]

小孩子は子供の意である。琉球語彙に「A child Warrabee」とある。沖縄語辞典に「童 warabi」とある。

160. 大人 思毒 [sʔtu] ↔ [ʃitu (舅)]

沖縄語辞典に「舅 situ」(si=ʃi) とある。

161. 婿 慕穀 [muku] ↔ [mu: ku (婿)]

沖縄語辞典に「婿 muuku」とある。

162. 師父 食芍 [ʃlʃio] ↔ [ʃiʃio: (師匠)]

「ʃio」(読書音) に対して「ʃiau」(口語音) も有る。沖縄語辞典に「師匠 sisjoo」(si=sj=ʃi) とある。

亦云夫子 [futsʔ] ↔ [ʔutsi]

「亦云」は注釈語、「また……と言う」の意味である。

163. 徒弟 波子人侍 [potsʔʒəɸʃl] ↔ [bo: dzi (坊子?)]

沖縄語辞典に「坊子 booʒi」(ʒi=dzi) とある。「人侍」不明。『琉球入学見聞録・土音の音訳字』に「練修」と解説したが、対音字の発音に合わない。

164. 醫生 亦煞 [iʃa] ↔ [ʔiʃia (医者)]

琉球語彙に「physician Ishsha」とある。沖縄語辞典に「医者 ʔisia」(si=ʃi) とある。

165. 僕 塗末 [t'umo] ↔ [tumo (供)]

琉球語彙に「sevant Toomoo」とある。沖縄語辞典に「供 tumu」(mu←mo)とある。

166. ヲ頭 烏那姑哇辣倍 [unakuualapei] ↔ [uinaguuarabi (女童)]

「ヲ頭」は女の召し使い、下女の意である。沖縄語辞典に「女 winagu」、「童 'warabi」とある。159條「小孩子 哇辣比」の対音字と違って、それぞれ比 (pi)、倍 (pei) として異なる。

167. 客人 恰谷 [tɕ'iaku] ↔ [tʃiaku (客)]

沖縄語辞典に「客 caku」(ca=tʃia)とある。

168. 主人 梯述 [t'iʃiɸ] ↔ [ti:ʃiu (亭主)]

沖縄語辞典に「亭主 tiisju」(sj=ʃi)とある。

169. 日本人 亞馬吐虚毒 [iamat'uɕiɸtu] ↔ [iamatuΦitu (大和人)]

沖縄語辞典に「日本 jamatu」とある。

170. 高麗人 柯列虚毒 [kolieɸiɸtu] ↔ [ko:re:Φitu (高麗人)]

「柯」は明代、清代前期に「ko」と読み、清後期から「kʏ」となる。沖縄語辞典に「朝鮮 kooree」とある。

171. 大 烏灰撒 [uxuəisa] ↔ [ʔuhuisa (大きい)]

沖縄語辞典に「大きい ʔuhwisaN」とある。

172. 小 枯撒 [kusa] ↔ [ku:sa (小さい)]

琉球語彙に「small coosa」とある。沖縄語辞典に「小さい kuusaN」とある。

173. 貧 薰述 [xiɸənʃiɸ] ↔ [huiNʃiu: (貧乏)]

沖縄語辞典に「貧乏 huiNsuu」(su=ʃiu)とある。

174. 富 喂格 [ueike] ↔ [ʔue:ki: (金持ち)]

沖縄語辞典に「金持ち ʔweekii」とある。中山伝信録に「富 喂既奴周」とある。

175. 親雲上 牌金 [p'aitɕin] ↔ [p'e:tʃin (親雲上)]

沖縄語辞典に「親雲上 peeciN」(ci=tʃ:)とある。親雲上、廃藩前の位階の名。

五、人事類

176. 作揖 禮及 [litɕi] ↔ [ri:dʒi (礼儀)]

作揖（中国旧時の）両手を胸元に組んで上下に動かす礼をすることである。沖縄語辞典に「礼儀 riizi」(zi=dʒi)とある。

177. 洗浴 阿美的 [ameiti] ↔ [amiti (浴びて)]

中山伝信録にも「洗浴 阿美的」とある。

178. 上人洗面 烏木的阿來 [umutialai] ↔ [ʔumutiʔarai (表洗ひ)]

上人、旧時、召使いがその主人のことをいう称呼。洗面、顔を洗う。沖縄語辞典に「表 ʔumuti」、「洗う ʔarajuN」とある。

179. 下人洗面 此辣阿來 [tsʔlaalai] ↔ [tsiraarai (面洗ひ)]

下人、召使い、使用人。沖縄語辞典に「面 ɕira」(ɕi=tsi)とある。

180. 拳頭 蹄子拱 [tʔitsʔkup] ↔ [ti: tsikuN (手突く)]

琉球語彙に「to quarrel Titskoong」とある。沖縄語辞典に「手 tii」、「突く ɕicuN」(ɕi=tsi)とある。中山伝信録にも「拳頭打 蹄子拱」がある。「拳頭」は中国語で名詞「拳」の意味で、琉球入学見聞録の人事門には動詞、形容詞を中心とされ、若し「拳」の意味なら、身体に入れるべきである。したがって、ここに「打」が脱落されたと思われる。

181. 打架 蒙羅 [muegluo] ↔ [muNdo: (喧嘩)]

「打架」は中国語でけんか(する)、喧噪(する)という意味である。沖縄語辞典に「喧嘩 muNdoo」とある。安郷方言には「蒙」を「mog」、「羅」を「lo」と読む。「蒙」は北京音で明から現代まで「mug→muəŋ→məŋ」という音変が発生した。琉球入学見聞録時代には mug より muəŋの方が妥当なのである。第二音節は d を l に誤聴して記したものだと思われる。

182. 脱衣 輕花子的 [tɕʔiɣxuatsʔti] ↔ [tɕiNhadzidi (着物脱いで)]

琉球語彙に「cloth or clothes ching」、「to undress Ching hajeeing」とある。沖縄語辞典に「着物 ciN」(ci=tɕi)、「脱ぐ haɕijuN」(ɕi=dzi)とある。

183. 殺 枯魯止 [kʔulutɕl] ↔ [kurutɕi (殺し)]

琉球語彙に「to kill korossu」とある。沖縄語辞典に「殺す kurusuN」とある。

184. 醉 威蒂 [ueiti] ↔ [ui: ti (酔って)]

沖縄語辞典に「酔う WiijuN」とある。

185. 睡 寧蒂 [niɣti] ↔ [niNti (寝て)]

琉球語彙に「sleeping nintee」とある。沖縄語辞典に「眠る niNzuN」とある。

186. 起来 烏機's [utɕiti] ↔ [ʔukiti (起きて)]

琉球語彙に「to wake Ooking」とある。沖縄語辞典に「起きて ʔukijuN」とある。琉球音からみると、第二音節対音字「機」はまだ口蓋化していない。

187. 疼 呀的 [iati] ↔ [iadi (痛んで)]

沖縄語辞典に「痛む januN」とある。浦添・小湾方言辞典に「痛む jamug」とある。

188. 行路 阿之 [atɕl] ↔ [ʔaʔtɕi (歩いて)]

琉球語彙に「to walk Atchoong」とある。沖縄語辞典に「歩く ʔaQcuN」とある。浦添・小湾方言辞典に「歩く ʔattɕug」とある。

189. 等待 麻之 [matsɿ] ↔ [matʃi (待ち)]
 琉球語彙に「stop Matee」とある。沖縄語辞典に「待つ macuN」とある。
190. 病 呀的 [iati] ↔ [iadi (病んで)]
 187條「疼」を参照する。琉球語彙に「sick yadong」とある。
191. 生 亦吉之 [itɕitsɿ] ↔ [ʔitʃitʃi (生きて)]
 沖縄語辞典に「生きる ʔicicuN (ci=tʃi)」とある。
192. 死 失直 [sɿtsɿ] ↔ [ʃitʃi (死)]
 琉球語彙に「die sinjuŋ」とある。沖縄語辞典に「死ぬ sinuN (si=ʃi)」とある。
 浦添・小湾方言辞典に「死ぬ ʃinuŋ」とある。
193. 傷風 哈那失機 [xanaʃɿtɕi] ↔ [hanaʃitʃi (風邪)]
 沖縄語辞典に「風邪 hanasici (si=ʃi ci=tʃi)」とある。浦添・小湾方言辞典に
 「風邪 hana ɕitʃi」とある。この項目以外、「哈」は「k'a」と発音、第5條「風」
 を参照する。
194. 好 求喇煞 [tɕ'iulaʃa] ↔ [tʃiurasa (美しい)]
 琉球語彙に「good Choorasa」とある。沖縄語辞典に「美しい curasaN (cu=
 tʃiu)」とある。浦添・小湾方言辞典に「美しい tʃurasag」とある。安郷方言に「煞」
 をsaと発音する。
195. 不好 挖煞 [uaʃa] ↔ [uaʔsa (悪い)]
 琉球語彙に「bad Wasa」とある。沖縄語辞典に「悪い waQsaN」とある。安郷
 方言に「煞」をsaと発音する。
196. 買 科的 [koti] ↔ [ko:ti (買って)]
 沖縄語辞典に「買う koojuN」とある。
197. 賣 屋的 [uti] ↔ [ʔuti (売って)]
 沖縄語辞典に「売る ʔujuN」とある。浦添・小湾方言辞典に「売る ʔuiŋ」とあ
 る。
198. 言語 枯毒八 [k'utupa] ↔ [kutuba (言葉)]
 「言語」は中国語で返事をする、口をきく、声をかけるなどの意味を持つ動詞であ
 る。日本語の「言葉」は中国語で「語言」と言う。沖縄語辞典に「言葉 kutuba」と
 ある。
199. 上緊走 准姑亦急 [tsiɛnkuitɕi] ↔ [paikuitʃi (速く行き)]
 『琉球館訳語』、陳侃『使琉球録』、蕭崇業『使琉球録』、『中山伝信録』にも「上緊
 走」(急いて行く、速く行くという意味)が有る。対音字は殆ど「排姑亦急」
 [paikuik (tʃ) i]とした(琉球館訳語は「急」ではなく「及」である)。琉球語の
 「速く行き [paikuik (tʃ) i] (pa→Φa→ha, i←ia)の対音から見ると、琉球入学見
 聞録の第一音節対音字「准」が「排」の誤字だと考えられる。

200. 夢 亦梅 [imei] ↔ [imi (夢)]

沖縄語辞典に「夢 imi」とある。中国語の「夢」は「夢を見る」意味も持つ。

201. 瘦 挨的 [iaiti] ↔ [iaiti: (瘦せる)]

琉球語彙に「lean (not fat) yaitee」とある。沖縄語辞典に「瘦せる 'jaşijuN」とある。明代と清代前期に「挨」がまだ「iai」と読み、清代後期から「ai」になる。安郷方言では「挨」を gai と読む。

202. 肥 快的 [kuaiti] ↔ [kuaiti: (肥えて)]

琉球語彙に「fat Quaittee」とある。沖縄語辞典に「肥える kweejuN」とある。

203. 早起 阿撒烏機 [asautçi] ↔ [ʔasaʔuki (早起)]

第81朝、186起来を参照する。琉球音から見ると、「機」はまだ口蓋化していなかった。

204. 晓得 失之 [ʃltʃl] ↔ [ʃitʃi (知って)]

沖縄語辞典に「知る sijuN」(si=ʃi) とある。晓得、知る、分かる。

205. 不晓得 失藍 [ʃllan] ↔ [ʃiraN (知らん)]

206. 回去 木毒利 [mutuli] ↔ [muduri (戻り)]

沖縄語辞典に「帰る mudujuN」、「戻り mudui」(i←ri) とある。

207. 坐 識吉 [ʃltçi] ↔ [sitʃi (敷き)]

沖縄語辞典に「敷く sicuN」、「敷き sici」(si=ʃi ci=tʃi) とある。

六、宮室類

208. 宮 密牙 [miia] ↔ [miia (宮)]

琉球語彙に「temple meea」とある。沖縄語辞典に「宮 mija」とある。

209. 屋 牙 [ia] ↔ [ia: (家)]

琉球語彙に「house ya」とある。沖縄語辞典に「家 jaa」とある。

210. 門 濁 [tʃuo] ↔ [dʒio: (門)]

沖縄語辞典に「門 zoo」(zo=dʒio) とある。沖縄対話にも「門 ジャウ (jo:)」とある。

210. 戸 花失利窟齒 [xuaʃlik'utʃl] ↔ [haʃirikutʃi (戸口)]

琉球語彙に「door hashirree」とある。沖縄語辞典に「戸 hasiru」(si=ʃi)、「口 kuci」(ci=tʃi) とある。浦添・小湾方言辞典に「戸口 haʃirugutʃi」とある。

212. 牕 麻毒喀 [matuk'a] ↔ [maduka (窓か)]

『琉球館訳語』、陳侃『使琉球録』に「窓 慢多」とある。中山伝信録に「馬都」とある。「か」は疑問を表す助詞だと考えられる。

213. 墻 哈吉 [k'atçi] ↔ [katʃi (垣)]

琉球語彙に「house katchee」とある。沖縄語辞典に「垣 kaci」(ci=tʃi)とある。

214. 亭 提 [tʰi] ↔ [ti: (亭)]

沖縄語辞典に「亭 tii」とある。

215. 園 逆哇 [niua] ↔ [niua (庭)]

沖縄語辞典に「庭 niwa」とある。

216. 堦 奇栽 [tɕitsai] ↔ [kidzai (階段)]

「堦」は「階」の異体字である。沖縄語辞典に「階段 kizai」とある。琉球語からみると、第一音節対音字は未だ口蓋化していなかった。

217. 瓦房 哈喇弗吉牙 [k'alafutɕiia] ↔ [ka: raΦutɕiia: (瓦葺き家)]

沖縄語辞典に「瓦 kaara」、「葺く hucuN」、「家 jaa」とある。

七、器用類

218. 弓 欲密 [iɯmi] ↔ [iumi (弓)]

琉球語彙に「A bow yoomee」とある。沖縄語辞典に「弓 jumi」とある。

219. 箭 依牙 [iia] ↔ [ʔiia (箭)]

琉球語彙に「A arrow Eea」とある。沖縄語辞典に「箭 ʔija」とある。

220. 担簦 塔阿谷 [taaku] ↔ [taagu (桶)]

沖縄語辞典に「桶 taagu」とある。沖縄対話に「手桶 ターグ [ta: gu]」とある。

221. 木杓 你木 [nipu] ↔ [ni: bu (柄杓)]

沖縄語辞典に「柄杓 niibu」とある。沖縄対話に「柄杓 ニーブ [ni: bu]」とある。

222. 脚踏棉 蓐子 [ziɯtsʰ²]

「脚踏棉」という名は琉球入学見聞録以前にも使録に現れ、「畳」のことを指す。明代の冊封使杜三策の門人胡靖『杜天使冊封琉球真記奇見』(1633)に地面に敷く「地席」を脚踏棉と記したのは最初である。以後清代の冊封使汪楫、林麟焄『使琉球雜録』(1683)、周煌『琉球国誌略』(1756)、李鼎元『使琉球記』(1800)も踏襲して近似した文字で記録した。「脚踏棉」は kiatami ε n 或いは tɕiatami ε n などを読み、あまり首里語の発音らしくないけど、首里以外の方言あるいはむりやり意味に合わせて(脚で踏む敷き綿)「タタミ」の発音を表記したのは確かなことである。後に冊封使費錫章の従客黄景福が書いた『続琉球国誌略』(1808)は始めて「部屋に細蓆を敷き、中身は草で、布を縁にして、塌筭密 (t'atami) という。」と指摘した。琉球入学見聞録が「脚踏棉」を項目としたのは間違っている。「蓐子」は中国語で「敷き布団」の意味を持ち、対音字だと考えられない。今の形より、むしろ「蓐子 脚踏棉」の方がもっと正しい。中山伝信録にも「脚踏棉 波着子 [putɕiatsʰ² (蘇州音)] とあるか

ら、琉球入学見聞録はその影響を受けたかもしれない。

223. 棹 列 [li ε] ↔ [ke: (櫂)]

沖縄語辞典に「櫂 kee」とある。対音字の子音 l は k の誤聴誤記だと思われる。

224. 浴桶 阿美塔阿谷 [ameit'aaku] ↔ [amittagu (浴桶)]

177洗浴、220担箆を参照する。

225. 椅子 依 [i] ↔ [i: (椅)]

琉球語彙に「chair ee (chinese)」とある。沖縄語辞典に「椅子 ii」とある。

226. 風爐 哈子魯 [k'ats²lu] ↔ [kadziru: (風炉)]

「哈子」は第5風を参照する。沖縄語辞典に「炉 ruu」とある。

227. 戥子 花喀依 [xuak'ai] ↔ [hakai (秤)]

戥子とは「中国旧式の小型はかり」である。沖縄語辞典に「秤 hakai」とある。

228. 天平 廳平 [t'ingp'ing] ↔ [tiNbiN (天秤)]

229. 刀 和竹 [xuotsiæ] ↔ [ho:tfiu: (包丁)]

沖縄語辞典に「包丁 hoocaa」(caa=tfia: ←tfiu: ←tfio:) とある。

230. 刀鞘 絲古撒耶 [s²kusaia] ↔ [sigusaia (直鞘)]

沖縄語辞典に「鞘 saja」とある。

231. 轎子 喀谷 [k'aku] ↔ [kagu (駕籠)]

轎子、中国旧式の駕籠。琉球語彙に「palanquin chair kagoo」とある。沖縄語辞典に「駕籠 kagu」とある。

232. 木套 阿失雜 [aʂltsa] ↔ [afidza (下駄)]

沖縄語辞典に「下駄 asiza」(si=ʃi za=dʒia←dza←da) とある。

233. 傘 哈撒 [k'asa] ↔ [kasa (傘)]

琉球語彙に「unbrella kassa」とある。沖縄語辞典に「傘 kasa」とある。

234. 床 捫臧 [məntsəŋ] ↔ [miNdzaN (御床)]

琉球語彙に「bed Nedokuni」とある。沖縄語辞典に「床 juka」、「床 tuku」とある。以上の発音はみな対音に合わない。中国語の「床」はベットで、読み方は tʂ'uaŋ (北京語)、tʂ'yaŋ (安郷方言) である。「臧」は琉球官生が読んだ中国語「床」の発音だと思われる。「捫」は mi (御、敬語を表す。音節末に添音 -N が有る) で、沖縄語辞典に「mi- (接頭) [美] 御 (み)。尊敬の接頭辞。」とある。

235. 燈 吐盧 [t'ulu] ↔ [tu: ru (灯籠)]

琉球語彙に「lantern tooroo」とある。沖縄語辞典に「灯籠 tuuru」とある。

236. 面桶 此喇塔阿來 [ts'ilat'aalai] ↔ [tsiratarai (面手洗)]

沖縄語辞典に「面 ɕira (ɕi=tsi)」とある。「広辞苑」に「手洗 手を洗うのに用いる湯または水を盛る器。」とある。

237. 鍋 那倍 [napei] ↔ [na: bi (鍋)]

沖縄語辞典に「鍋 naabi」とある。

238. 鍋蓋 那倍弗答 [napeifuta] ↔ [na: bi Φuta (鍋蓋)]

琉球語彙に「Jar' its top or cover Hoota」とある。沖縄語辞典に「蓋 huta」(hu=Φu) とある。

239. 瓦罐 哈阿美 [k'aamei] ↔ [kaami (甕)]

沖縄語辞典に「甕 kaami」とある。

240. 掃箒 和吉 [xuotɕi] ↔ [ho: tɕi (箒)]

沖縄語辞典に「箒 hooci」(ci=tɕi) とある。

241. 舡 弗你 [funi] ↔ [Φuni (船)]

「舡」、船の異体字。琉球語彙に「A ship hoonee」とある。沖縄語辞典に「船 huni」(hu=Φu) とある。

242. 算盤 述奴班 [tɕiɰnupan] ↔ [ɕiunubaN (算盤)]

「算」は「算」の異体字である。沖縄語辞典に「算盤 sunubaN」(su=ɕiu) とある。

243. 油盞 思子吉 [sʔtsʔtɕi] ↔ [ɕidɕitɕi (油皿)]

沖縄語辞典に「油皿 sizici」(si=ɕi←si zi=dɕi←dzi ci=tɕi) とある。中山伝信録に「油盞 雖之既」[suitɕitɕi] とある。

244. 梳 撒八吉 [sapatɕi] ↔ [sabatɕi (櫛)]

沖縄語辞典に「櫛 sabaci」(ci=tɕi) とある。

245. 索 此那 [tsʔna] ↔ [tɕina (綱)]

琉球語彙に「rope Chinna」とある。沖縄語辞典に「綱 cina」(ci=tɕi←tsi) とある。

246. 斧頭 由吉 [iəutɕi] ↔ [iu: tɕi (斧)]

「頭」、接尾辞である。沖縄語辞典に「斧 juuci」(ci=tɕi) とある。

249. 湯盆 阿美搭阿美 [ameitaamei] ↔ [amitaagu (浴桶)]

第177洗浴、224浴桶と220担箒を参照する。中国語の「湯」はスープ、汁の意味である。二番めの「美」は「谷」の誤字だと思われる。

248. 竹籠 他吉踢依盧 [t'atɕit'iilu] ↔ [dakitiiru (竹手籠)]

琉球語彙に「Bamboo-cane Dakee」とある。沖縄語辞典に「竹 daki」、「手籠 tiiru」とある。琉球音から見ると、第二音節の対音字「吉」は未だ口蓋化していない。

249. 筴 花失 [xuɤɕɿ] ↔ [haɕi (箸)]

琉球語彙に「Chopsticks Fashay」とある。沖縄語辞典に「箸 hasi (si=ɕi) とある。

250. 鎖 除洗 [s̺ɛ̺i] ↔ [sa:ʃi (錠)]

琉球語彙に「watch key saseenoo quaw」とある。沖縄語辞典に「錠 saasi」(si=ʃi) とある。安郷方言に「除」が「s̺ɛ̺」と読む。

251. 烟筒 奇失禮 [t̺ɕʰiʃl̺i] ↔ [t̺ʃiʃiri (煙管)]

琉球語彙に「pipe shirree」とある。沖縄語辞典に「煙管 cisiri」(ci=t̺ʃi si=ʃi) とある。

252. 荷包 呼作 [xutsuo] ↔ [husa (房)]

荷包、袋物。琉球語彙に「Tobaccopouch foosa」とある。沖縄語辞典に「房 husa」とある。安郷方言に「作」が tso と発音する。

253. 茶鍾 茶碗 [t̺sauan] ↔ [t̺ʃiauaN (茶碗)]

鍾、さかずきである。琉球語彙に「tea cup Chawung」とある。沖縄語辞典に「茶碗 cawaN」(ca=t̺ʃia) とある。

254. 飯碗 翁班麼喀倚 [uŋpaumak'ai] ↔ [ʔubaNmakai (御飯碗)]

琉球語彙に「boiled rice Umbang」とある。沖縄語辞典に「御飯 ʔubuN」、「碗 makai」とある。対音字「麼」は轻声化して現代中国語に mǎ と読むのが多い。

255. 銅罐 壓光 [iakuaŋ] ↔ [iaʔkuaN (藥罐)]

沖縄語辞典に「藥罐 jaQkwaN」とある。

256. 蠟簪 羅塔低 [luot'ati] ↔ [ro:tati (蠟立て)]

「蠟」は「蠟」の異体字、「蠟簪」は蠟台、ろうそく立てである。沖縄語「蠟 roo」とある。

257. 圍棋 古 [ku] ↔ [gu: (碁)]

沖縄語辞典に「碁 guu」とある。

258. 香爐 柯盧 [k'olu] ↔ [ko:ru (香炉)]

「柯」は現代北京音で「k'ʌ」、安郷方言で「k'o」と読む。沖縄語辞典に「香炉 ʔukooru」とある。

259. 箱子 滑谷 [xuaku] ↔ [haku (箱)]

「子」は接尾辞である。沖縄語辞典に「箱 haku」とある。

260. 磁盤 花止 [xuatsl̺] ↔ [hatʃi (鉢)]

磁盤、磁器製の皿や鉢である。琉球語彙に「bonnet or headdress worn by the natives hatchee (鉢) matchee (巻)」とある。沖縄語辞典に「鉢 haci (nuku)」(ci=t̺ʃi) とある。

261. 木盤 烏失吉 [uʃlt̺ɕi] ↔ [ʔuʃit̺ʃi (御敷)]

沖縄語辞典に「敷 sici」(si=ʃi ci=t̺ʃi) とある。

262. 匣 滑谷 [xuaku] ↔ [haku (箱)]

第259箱子を参照する。

263. 水注 梅子利 [meits²li] ↔ [midzi²iri (水入れ)]

沖縄語辞典に「水入れ mi²zi²iri (zi=dzi) とある。

264. 鏡子 哈哈密 [k'ak'ami] ↔ [kagami (鏡)]

沖縄語辞典に「鏡 kagaN」(-N←mi) とある。

265. 酒壺 撒吉並 [satɕipig] ↔ [sakibiN (酒瓶)]

沖縄語辞典に「酒瓶 sakibiN」 とある。琉球音から見ると、第二対音字の「吉」は未だ口蓋化していない。

266. 女短簪 因渣饑花 [intʂatɕixua] ↔ [ʔiNtʂia: dʒi: hua: (短簪)]

「因渣」、「短い」の対音で、第46「短」を参照する。沖縄語辞典に「簪 (かんざし) ziihwaa」(zi=dʒi) とある。

267. 女長簪 那喀饑花 [nak'atɕixua] ↔ [naga: dʒi: hua: (長簪)]

「那喀」、「長い」の対音で、第47「長」を参照する。

268. 酒杯 煞喀子吉 [ʂak'ats²tɕi] ↔ [sakadzitʂi (林)]

沖縄語辞典に「杯 sakazici」(zi=dzi ci=tʂi) とある。安郷方言に「煞」が「sa」と読む。

269. 象棋 充機 [tɕ'iuŋtɕi] ↔ [tʂiuNdʒi: (将棋)]

象棋、中国将棋。琉球語彙に「象棋 choonjee」 とある。沖縄語辞典に「将棋 cuNzii」(cu=tʂiu zi=dʒi) とある。

270. 甲 欲魯依 [iɤlui] ↔ [iurui (鎧)]

沖縄語辞典に「鎧 jurui」 とある。

271. 盔 哈不毒 [k'aputu] ↔ [kabutu (兜)]

盔、かぶとである。沖縄語辞典「兜 kabutu」 とある。

272. 弦 子魯 [ts²lu] ↔ [tsiru (弦)]

琉球語彙に「fiddle strings Cheeroo」 とある。沖縄語辞典に「弦 ɕiru」(ɕi=tsi) とある。

273. 鎗 挨 [iai] ↔ [iai (槍)]

沖縄語辞典に「槍 jai」 とある。「挨」の発音は第201「瘦 挨的」を参照する。

274. 盆 大籐 [talai] ↔ [tarai (盥)]

沖縄語辞典「盆 大籐」 とある。陳侃『使琉球録』と蕭崇業『使琉球録』と中山伝信録にも「盆 大籐」 とある。日葡辞書に「盥 tarai」 とある。

275. 瓶 炳 [piŋ] ↔ [biN (瓶)]

沖縄語辞典に「瓶 biN」 とある。

276. 桅 花失辣 [xuaʂlla] ↔ [hafira (柱)]

琉球語彙に「mast Hasseeda」とある。沖縄語辞典に「柱 haaja」とある。琉球語彙の da は ra の変音である。『琉球方言音韻の研究』（中本正智）401ページを参照する。

277. 舵 哈滞 [k'atɕɿ] ↔ [kadʒi (舵)]

沖縄語辞典に「舵 kazi」(zi=dʒi) とある。

278. 櫓 爐 [lu] ↔ [ru: (櫓)]

琉球語彙に「scull of a boat Doo」とある。沖縄語辞典に「櫓 ruu、duu」とある。duu、ruu はともに ro から変化してきた発音だと考えられる。

279. 絃 三審 [sanɕiən] ↔ [saNɕiN (三弦)]

沖縄語辞典に「三味線 saNsiN」(si=ɕi) とある。中国語の「絃」の意味は272條の「弦」と同じなので、「絃」の前にもともと「三」があったと思われる。

280. 篷 呼 [xu] ↔ [hu: (帆)]

篷、船のとま或いは船の帆である。琉球語彙に「sail foo」とある。沖縄語辞典に「帆 huu」とある。

281. 帶 烏比 [upi] ↔ [ʔu: bi (帶)]

琉球語彙に「girdle obee」とある。沖縄語辞典に「帶 ʔuubi」とある。

282. 書 失木子 [ɕɿmutsʔ] ↔ [ɕimutsi (書物)]

琉球語彙に「book Sheemootsee」とある。沖縄語辞典に「本 sjumuɕi」(sju=ɕiu ←ɕio ɕi=tsi) とある。琉球語彙の「shee」は「失」の発音に近い。

283. 晝 椅 [i] ↔ [i: (絵)]

琉球語彙に「draw a picture Eu-katchoong」(ee 絵) とある。沖縄語辞典に「絵 ii」とある。

284. 字 日 [ɕɿ] ↔ [dʒi: (字)]

琉球語彙に「letter or character Jee」とある。沖縄語辞典に「字 zii」(zi=dʒi) とある。

285. 筆 弗的 [futi] ↔ [Φudi (筆)]

琉球語彙に「pencil Hoodee」とある。沖縄語辞典に「筆 hudi」(hu=Φu) とある。

286. 墨 思密 [sʔmi] ↔ [simi (墨)]

琉球語彙に「ink simmee」とある。沖縄語辞典に「墨 ɕimi」(ɕi=si) とある。

287. 紙 哈比 [k'api] ↔ [kabi (紙)]

琉球語彙に「paper kabee」とある。沖縄語辞典に「紙 kobi」とある。

288. 硯 息子利 [sitsʔli] ↔ [sidziri (硯)]

沖縄語辞典に「硯 ɕiziri」(ɕi=si zi=dʒi←dzi) とある。

289. 扇子 窩吉 [uotɕi] ↔ [ʔo: dʒi (扇)]

琉球語彙に「fan ojee」とある。沖縄語辞典に「扇 ʔoozi (zi=dʒi) とある。

290. 屏風 妙不 [miaupu] ↔ [bio: bu (屏風)]

沖縄語辞典、陳侃『使琉球録』、蕭崇業『使琉球録』、中山伝信録にともに「屏風 飄布 (p'iaupu)」とある。沖縄語辞典にも「屏風 bjoobu」とある。沖縄対話に「屏風 ミヤウブ」、琉球語便覧に [myo-bu] とある。

291. 花瓶 花那炳 [xuanapiŋ] ↔ [hanabiN (花瓶)]

琉球語彙に「flower fanna」とある。沖縄語辞典に「花 hana」とある。

292. 香盆 柯以禮 [koili] ↔ [ko:ʔiri (香入れ)]

沖縄語辞典に「香 koo」、「入れ ʔiri」とある。「柯」の発音は258條「香爐」を参照する。

293. 玉帯 塔麻烏比 [t'amaupi] ↔ [tamaʔu: bi (玉帯)]

琉球語彙に「beads tamma」とある。沖縄語辞典に「玉 tama」とある。

294. 金杯 輕撒喀子吉 [tɕiŋsak'atsʔtɕi] ↔ [tʃiNsakadzitʃi (金杯)]

琉球語彙に「gold ching」とある。沖縄語辞典に「金 ciN」(ci=tʃi) とある。「杯」の発音は268條「酒杯 煞喀子吉」を参照する。

八、身體類

295. 頭髮 哈喇子 [k'alatsʔ] ↔ [karadzi]

琉球語彙に「the hair karrazzee」、「web-footed bird head Makarajjee」とある。沖縄語辞典に「髮 karazi」(zi=dʒi←dzi) とある。中山伝信録に「髮 哈那子 (k'anatsʔ)、又喀拉齊 (k'ara'dzi)」とある。第三音節の子音は琉球語彙の「zzee」「jje」と中山伝信録の「tsʔ」、「dʒi」から見ると、当時に dzi と dʒi の発音は共存している。

296. 眉 麻由 [maiəu] ↔ [maju (眉)]

琉球語彙に「eyebrows Maioh」とある。沖縄語辞典に「眉 maju」とある。

297. 眼 美 [mei] ↔ [mi: (目)]

琉球語彙に「eye mee」とある。沖縄語辞典に「目 mii」とある。

298. 耳 密密 [mimi] ↔ [mimi (耳)]

琉球語彙に「the ear mimmee」とある。沖縄語辞典に「耳 mimi」とある。

299. 鼻 花納 [xuana] ↔ [hana (鼻)]

琉球語彙に「nose Honna」とある。沖縄語辞典に「鼻 hana」とある。

300. 舌 失渣 [ʃltʃa] ↔ [ʃitʃia (舌)]

琉球語彙に「tongue Stcha」とある。沖縄語辞典に「舌 sica」(si=ʃi ca=tʃia)

とある。

381. 口 窟止 [k'utɕɿ] ↔ [kutɕi (口)]

琉球語彙に「beak of a web-footed bird Coochee」とある。沖縄語辞典に「口 kuci」(ci=tɕi)とある。

302. 齒 滑 [xua] ↔ [ha: (齒)]

琉球語彙に「tooth Ha」とある。沖縄語辞典に「齒 haa」とある。

303. 髮 虚及 [ɕiɯtɕi] ↔ [Φidɕi (髭)]

琉球語彙に「the beard Feejee」とある。沖縄語辞典に「髭 hwizi」(hwi=Φi zi=dɕi)とある。第295條「頭髮」が既に有ったから、ここの「髮」は「髭」或いは「鬚」の誤字だと考えられる。中山伝信録に「鬚 非几」[fitɕi]とある。

304. 手 蹄 [t'i] ↔ [ti: (手)]

琉球語彙に「hand Tee」とある。沖縄語辞典に「手 tii」とある。

305. 脚 虚煞 [ɕiɯsa] ↔ [Φifia (足)]

沖縄語辞典に「足 hwisja」(hwi=Φi sj=fɿ)とある。「虚煞」は「膝」の対音字である。

306. 身 魯 [lu] ↔ [du: (胴)]

沖縄語辞典に「身 duu」とある。浦添・小湾方言辞典にも「体をもつ du: (体) mutɕiuŋ」とある。子音 d-を l-と音記したのは、このほかに第181條「打架」、第278條「櫓」にもある。誤聴誤記か、それとも発音者の個人特徴あるいは一地区の方言特徴か、原因の究明はまだ必要である。

307. 心 氣木 [tɕimu] ↔ [tɕimu (心)]

沖縄語辞典に「心、肝 cimu」(ci=tɕi)とある。

308. 頭 科倍 [k'opei] ↔ [kubi (首)]

琉球語彙に「neck Coobee」とある。沖縄語辞典に「首 kubi」とある。「科」の発音は近世から現代まで「k'uo→k'o→k'ʌ」のように変化してきた。現代安郷方言は k'o と発音する。

309. 奶 耻 [tɕɿ] ↔ [tɕi: (乳)]

奶、乳房である。琉球語彙に「nipple chee」とある。沖縄語辞典に「乳 cii」(ci=tɕi)とある。

310. 額 虚渣衣 [ɕiɯtsai] ↔ [Φitɕiai (額)]

琉球語彙に「forehead Fitchayeh」とある。沖縄語辞典に「額 hwicee」(hwi=Φi cee←cai=tɕiai←tai)とある。

311. 臍 呼述 [xuɕiū] ↔ [hufiu (臍)]

琉球語彙に「navel Whoosoo」とある。沖縄語辞典に「臍 husu」(su=fɿu)と

ある。

312. 指頭 威倍 [uəipe] ↔ [ʔi: bi (指)]

頭、接尾辞。琉球語彙に「The finger Eebee」とある。沖縄語辞典に「指 ʔiibi」とある。

313. 腿 木木 [mumu] ↔ [mumu (腿)]

琉球語彙に「the thigh Moomoo」とある。沖縄語辞典に「股 mumu」とある。

九、衣服類

314. 衣服 衾 [tɕʰin] ↔ [tʃiN (着物)]

琉球語彙に「cloth or clothes Ching」とある。沖縄語辞典に「着物 ciN (ci = tʃi)」とある。

315. 帽 膜子 [motsʔ] ↔ [bo: ʃi (帽子)]

琉球語彙に「cap mawtsee」とある。沖縄語辞典に「帽子 boosi」(si = ʃi) とある。浦添・小湾方言辞典に「帽子 mo: tʃaŋ」、「帽子編み bo: ʃikuna」とある。以上の資料を見ると「帽」の発音は沖縄に「mo:」と「bo:」と併存しているのが分かる。ʃi を tsʔ と読むのは貴族・士族の男子発音だろう。

316. 帯 烏比 [upi] ↔ [ʔu: bi (帯)]

琉球語彙に「girdle Obee」とある。沖縄語辞典に「帯 ʔuubi」とある。

317. 袴 花喀馬 [xuakʰama] ↔ [hakama (袴)]

袴、ズボンやスラックスである。琉球語彙に「Trousers Hackkama」とある。沖縄語辞典に「袴 hakama」とある。

318. 手巾 梯煞之 [tʰisatsʰl] ↔ [ti: sa: dʒi (手拭)]

手巾、タオルや手ぬぐいである。琉球語彙に「handkerchief Teesadgee」とある。沖縄語辞典に「手拭 tiisaazi」(zi = dʒi) とある。安郷方言に「煞」が sa と読む。

319. 被 烏獨 [utu] ↔ [ʔu: du (蒲団)]

被、掛け布団である。沖縄語辞典に「蒲団 ʔuudu」とある。

320. 帳子 喀着 [kʰatsʰɿ] ↔ [katʃia (蚊帳)]

沖縄対話に「蚊帳 カチャ」とある。琉球語便覧に「蚊帳 kacha」とある。沖縄語辞典に「蚊帳 kaca」(ca = tʃia) とある。現代北京語に「着」はまた tʃuo, tʃau の発音をする。

321. 氈 木身 [muʃiən] ↔ [muʃiN (氈)]

氈、毛布のことである。沖縄語辞典に「毛布 musin」(si = ʃi) とある。

322. 枕 媽寡 [makua] ↔ [maʔkua (枕)]

琉球語便覧に「枕 makkwa」、沖縄語辞典に「枕 maQkwa」とある。

323. 褥子 福冬 [futuj] ↔ [ΦuduN (布団)]

褥子、敷き布団である。

324. 襪 塔必 [t'api] ↔ [ta: bi (足袋)]

襪、足下である。琉球語便覧に「足袋 tabi」、沖縄語辞典に「足袋 taabi」とある。

325. 靴子 寛古 [k'uanku] ↔ [kuaNkutsi (官靴)]

靴子、長靴で、特に昔官府の役人の履物である。沖縄語辞典に「官 kuaN」とある。第三音節の対音字が脱落したと思われる。

326. 鞋 煞巴 [sapa] ↔ [saba (草履)]

琉球語彙に「shoes sabock」とある。沖縄語辞典に「草履 saba」とある。原本には「煞色」として、中山伝信録「鞋 煞巴」によれば、「色」は「巴」の誤字であることが分かる。安郷方言に「煞」が sa と読む。

327. 笠 喀煞 [k'asa] ↔ [kasa (笠)]

琉球語彙に「hat kassa」とある。沖縄語辞典に「笠 kasa」とある。安郷方言に「煞」が sa と読む。

328. 汗衫 毒巾 [tutɕin] ↔ [dudʒiN (胴衣)]

沖縄語辞典に「胴衣 duziN」(zi=dʒi) とある。汗衫、中国式のシャツ、汗とりシャツである。

329. 絹 亦周 [itʃou] ↔ [ʔi: tʃiu (絹)]

琉球語彙に「silk Eechoo」とある。沖縄語辞典に「絹 ʔiicu」(cu=tʃiu) とある。

330. 緞 動子 [tuɕtsʔ] ↔ [duNʃi (緞子)]

沖縄語辞典に「緞子 duNsi」(si=ʃi) とある。第二音節対音字の tsʔ の発音から見ると、貴族・士族の発音或いは中国語の発音をしている。

331. 紗 煞 [sa] ↔ [sa (紗)]

安郷方言に「煞」は「sa」と読む。琉球館訳語、陳侃『使琉球録』、蕭崇業『使琉球録』、中山伝信録には凡て「紗 撒 (sa)」とある。

332. 羅 羅 [luo] ↔ [lo (羅)]

第331條のように、ほかの寄語資料は全部「羅 羅」とある。「羅」の発音はおそらく日本語漢音の ra ではなく、中国語式の luo 或いは lo と考えるのは妥当なのである。

333. 布 奴奴 [nunu] ↔ [nunu (布)]

琉球語彙に「red cloth Akassa nonoo」とある。沖縄語辞典に「布 nunu」とある。

334. 綿衣 哇答一利衾 [uatailitɕin] ↔ [uataʔiritʃiN (綿入れ着物)]

沖縄語辞典に「綿入れ wataʔiri」とある。

335. 裙 喀喀密 [k'ak'ami] ↔ [kakami (下裳)]

裙、婦人のスカート、もすそである。沖縄語辞典に「下裳 kakaN」(-N←mi) とある。

十、飲食類

336. 飯 翁班 [uŋpan] ↔ [ʔuNbaN (御飯)]

琉球語彙に「boiled rice Umbang」とある。沖縄語辞典に「御飯 ʔubuN」とある。

337. 酒 煞機 [ʃatɕi] ↔ [saki (酒)]

琉球語彙に「Wine Sakkee」とある。沖縄語辞典に「酒 saki」とある。琉球音から見ると、第二音節対音字「機」は未だ口蓋化していない。安郷方言に「煞」は sa と読む。

338. 煙 塔八孤 [t'apaku] ↔ [tabaku (煙)]

琉球語彙に「tobacco Tobacco」とある。沖縄語辞典に「煙 tabaku」とある。

339. 油 庵答 [anta] ↔ [ʔaNda (油)]

沖縄語辞典に「油 ʔaNda」とある。

340. 醬 彌述 [miʃiɸ] ↔ [misu (味噌)]

沖縄語辞典に「味噌 'Nsu」('N←mi) とある。安郷方言に述は su と読む。

341. 醬油 芍由 [ʃiaoɪu] ↔ [ʃio: iu: (醬油)]

沖縄語辞典に「醬油 sjoojuu」(sj=ʃi) とある。「芍」は北京音で ʃio→ʃiau→ʃau のように変化した。安郷方言には so と読む。

342. 米 窟美 [k'umei] ↔ [kumi (米)]

琉球語彙に「rice Coomee」とある。沖縄語辞典に「米 kumi」とある。

343. 鹽 麻叔 [maʃiɸ] ↔ [ma: ʃiu (塩)]

琉球語彙に「salt Mashoo」とある。沖縄語辞典に「塩 maasju」(sj=ʃi) とある。

344. 豆腐 拖福 [t'uofu] ↔ [to: Φu (豆腐)]

沖縄語辞典に「豆腐 toohu」(hu=Φu) とある。安郷方言に拖は t'o と読む。

345. 茶 茶 [tʃa] ↔ [tʃia: (茶)]

琉球語彙に「tea Cha」とある。沖縄語辞典に「茶 caa」(ca=tʃia) とある。

346. 肉 失失 [ʃlʃl] ↔ [ʃiʃi (肉)]

琉球語彙に「flesh Shishee」とある。沖縄語辞典に「肉 sisi」(si=ʃi) とある。

347. 菜 亞色 [iaʃai] ↔ [iasai (野菜)]

沖縄語辞典に「野菜 jaʃee」(ʃee=se: ←sai) とある。「色」は北京官話で ʃai (口語音) と sɿ (讀書音)、安郷方言で sɛ と読む。ここの「色」は琉球音の se: に対

音する可能性も有る。

348. 素麺 素閔 [suomin] $\longleftrightarrow$ [so: miN (素麺)]

沖縄語辞典に「素麺 soomiN」とある。安郷方言に素は so と読む。

349. 蒜 灰魯 [xuilu] $\longleftrightarrow$ [huiru (大蒜)]

沖縄語辞典に「大蒜 hwiru」とある。

350. 西瓜 西刮 [sikua] $\longleftrightarrow$ [si: kua (西瓜)]

沖縄語辞典に「西瓜 siikwa」(si=fj←si←sui) とある。歯茎音の口蓋化は琉球入学見聞録に未だ発生していなく、基本的に琉球音の ts、dz、s、などと対音する。ここに新たに始まった発音として西は口蓋音の φ i と読み、fj と対音する可能性もある。

351. 冬瓜 失布衣 [sɿpui] $\longleftrightarrow$ [ʃibui (冬瓜)]

沖縄語辞典に「冬瓜 sibui (si=fj) とある。

352. 薑 芍喀 [siaok'a] $\longleftrightarrow$ [ʃio: ga: (生薑)]

沖縄語辞典に「生薑 sjoogaa」(sj=fj) とある。

353. 黑豆 枯魯馬閔 [k'ulumamin] $\longleftrightarrow$ [kurumami (黑豆)]

沖縄語辞典に「黑豆 kurumaami」とある。第四対音字閔の -n 部分は誤聴によったものだろう。

354. 蕉實 巴煞那衣 [paʃanai] $\longleftrightarrow$ [baʃianai (香蕉)]

蕉實、芭蕉の実、バナナである。沖縄語辞典に「香蕉 basjanai」(sj=fj) とある。

355. 番薯 番子母 [fantsʔmu] $\longleftrightarrow$ [ΦaNsumu (薩摩薯)]

番薯、サツマイモである。沖縄語辞典に「薩摩薯 haNsu」(ha←Φa)、「芋 ʔNmu」(ʔN←i) とある。琉球語彙に「sweet potatoes Moo」とある。「番子」の対音は本来「番薯」で、中国から来た言葉だと思う。「芋」の対音は琉球語彙のように、i から変化した ʔN を音記していない。

356. 豆芽菜 馬米那 [mamina] $\longleftrightarrow$ [ma: mina (もやし)]

沖縄語辞典に「もやし maamina」とある。

357. 餅 木之 [mutʂɿ] $\longleftrightarrow$ [mutʃi (餅)]

沖縄語辞典に「餅 mucu」(ci=tʃi) とある。

358. 魚 亦由 [iiəu] $\longleftrightarrow$ [ʔiiu (魚)]

琉球語彙に「fish Eeo」とある。沖縄語辞典に「魚 ʔiju」とある。

359. 蝦 色 [sai] $\longleftrightarrow$ [ʃe: (蝦)]

沖縄語辞典に「川蝦 ʃeegwaa」、「ばった ʃee」(ʃee=ʃee←sai) とある。浦添・小湾方言辞典に「小形の蝦 ʃe:」とある。「色」の発音は sɿ であることも考えられる。

360. 吃飯 喀煞美 [k'aʃamei] $\longleftrightarrow$ [ʔasame: (朝飯)]

沖縄語辞典に「朝 ʔasa」、「飯 mee」とある。「吃飯」(御飯を食べる)と違って「朝めし」の発音を表記した。ʔをk'で対音するのは琉球館訳語、陳侃使琉球録にも有る。安郷方言に「煞」は「sa」と読む。

十一、珍寶類

361. 金 枯喀泥 [k'uk'ani] ↔ [kugani (金)]

琉球語彙に「button kogannee」とある。沖縄語辞典に「金 kugani」とある。

362. 銀 南夾 [nantɕia] ↔ [naNdɕia (銀)]

沖縄語辞典に「銀 naNza」(za=dɕia)とある。

363. 錢 井 [tɕiŋ] ↔ [dɕiN (錢)]

沖縄語辞典に「錢 ziN」(zi=dɕi)とある。

364. 銅 阿噶喀泥 [ak'ak'ani] ↔ [ʔakagani (銅)]

沖縄語辞典に「銅 ʔakagani」とある。

365. 鐵 窟碌喀泥 [k'uluk'ani] ↔ [kurukani (鐵)]

沖縄語辞典に「鐵 kurukani」とある。

366. 錫 息子 [sitsʔ] ↔ [sidzi (錫)]

沖縄語辞典に「錫 ɕiɕi」(ɕi=si ɕi=dzi)とある。

367. 玉 撻馬 [tama] ↔ [tama (玉)]

琉球語彙に「beads Tamma」とある。沖縄語辞典に「玉 tama」とある。

368. 石 亦石 [iɕl] ↔ [ʔifi (石)]

琉球語彙に「stone Ishee」とある。沖縄語辞典に「石 ʔisi」(si=fi)とある。

369. 硫磺 由哇 [iəuua] ↔ [iu: wa: (硫黄)]

沖縄語辞典に「硫黄 'juuwaa」とある。

370. 琥珀 枯花古 [k'uxuaku] ↔ [kuhaku (琥珀)]

十二、通用類

371. 甜 阿媽煞 [amaɕa] ↔ [amasa (甘さ)]

琉球語彙に「sweet Amasa」とある。沖縄語辞典に「甘い ʔamasaN」とある。安郷方言に「煞」はsaと読む。以下の十一の「煞」もsaで発音する可能性が有る(第382、386条を除く)。

372. 酸 西煞 [siɕa] ↔ [si: sa (酸さ)]

琉球語彙に「sour Seesa」とある。沖縄語辞典に「酸い ɕiisaN」(ɕi=si)とある。

373. 鹹 什布喀喇煞 [ɕlɸuk'alasa] ↔ [ɕipukarasa (塩辛さ)]

鹹、塩の味、塩辛いこと。沖縄語辞典に「塩辛い sipukarasaN」(si=fi)とある。

374. 淡 阿花煞 [axuʌʂa] ↔ [ʔahuasa (淡さ)]

沖縄語辞典に「薄い ʔahwasaN」とある。

375. 黄 奇魯 [tɕilu] ↔ [tʃi:ru (黄色)]

琉球語彙に「yellow Cheeroo」とある。沖縄語辞典に「黄色 ciiru」(ci=tʃi)とある。

376. 紅 阿喀煞 [ak'aʂa] ↔ [ʔakasa (赤さ)]

琉球語彙に「red Akassa」とある。沖縄語辞典に「赤い ʔakasaN」とある。

377. 青 窩煞 [uoʂu] ↔ [ʔo:sa (青さ)]

琉球語彙に「green Osa」とある。沖縄語辞典に「青い ʔoosaN」とある。

378. 白 失魯煞 [ʂlɭuʂa] ↔ [ʃirusa (白さ)]

琉球語彙に「white Sheerosa」とある。沖縄語辞典に「白い sirusaN」(si=ʃi)とある。

379. 紫 木喇煞吉 [mulaʂatɕi] ↔ [murasatʃi (紫)]

琉球語彙に「purple Moolasachee」とある。沖縄語辞典に「紫 murasaci」(ci=tʃi)とある。

380. 黒 窟魯煞 [k'uluʂa] ↔ [kurusa (黒さ)]

琉球語彙に「black kurusa」とある。沖縄語辞典に「黒い kurusaN」とある。

381. 念書 西米那喇的 [siminalati] ↔ [siminarati (墨習って)]

念書、本を読む、学習すること。沖縄語辞典に「墨 ʂimi」(ʂi=si)、「習う nara-juN (-ti)」とある。

382. 香 哈巴煞 [k'apaʂa] ↔ [kabaʃia (香ばさ)]

琉球語彙に「smell kabbasha」とある。沖縄語辞典に「香ばしい kobasjaN」(sj=ʃi)とある。

283. 臭 窟煞煞 [k'uʂaʂa] ↔ [kusasa (臭さ)]

沖縄語辞典に「臭い kusasaN」とある。

384. 説話 木奴喀達里 [munuk'atali] ↔ [munukatari (物語)]

説話、話す、物語ることである。沖縄語辞典に「物語 munukatari」とある。

385. 不敢 揚密撒 [iaɣmisa] ↔ [iaNmi (やめ)]

不敢は「敢えて…せず」、「…する勇気がない」の意味である。沖縄語辞典に「やめ iamii」とある。対音字から見ると第一音節の末に添音-Nがある。「撒」の対音は未詳である。琉球入学見聞録以前の使録と寄語資料にも殆どこの項目が有る。

386. 喜歡 福古喇煞 [fukulaʂa] ↔ [ʔukuraʃia (喜ぶ)]

喜歡、喜ぶことである。沖縄語辞典に「喜ぶ hukurasjaN」(hu=ʔu sj=ʃi)とある。

387. 笑 瓦喇的 [ualati] ↔ [uarati (笑って)]

琉球語彙に「laughing Warratee」とある。沖縄語辞典に「笑う warajuN (=ti) とある。

388. 啼 那及 [natɕi] ↔ [natʃi (泣き)]

琉球語彙に「to cry Nachoorg」とある。沖縄語辞典に「泣く nacuN」(ci=tʃi) とある。

389. 歌 屋達 [uta] ↔ [ʔuta (歌)]

琉球語彙に「song Oota」とある。沖縄語辞典に「歌 ʔuta」とある。

〈2〉 「土音」以外の寄語と字音の解説

卷一・星土

390. 府 土名間切

府・土名では間切と言う。中山伝信録に「府 間切」がある。間切、madʒiri、琉球王国時代の行政区画である。「土音」57條「府 麻吉歴」を参照する。

391. 村頭 土名母喇

中山伝信録に「村 母喇 (mula) とある。「土音」58條「村 母拉」を参照する。頭、接尾辞。

392. 泊 土音土馬爺、一字三音。

『中山伝信録』から引用したものである。「土音」第67條「泊 土馬爺」を参照する。

393. 辻山 辻音失汁、一字兩音

「土音」第68條「辻 失汁」を参照する。

394. 久米 糸字土音苦念搭、一字三音、今訛爲久米

『中山伝信録』から引用したものである。「土音」第69「久米 苦念搭」を参照する。久米が「糸」の間違いという説は正しくない。

395. 喜屋武 讀如腔、三字一音

「土音」第70「喜屋屋 腔」を参照する。

396. 羣宮城 土音羣爲五十、宮爲訛、城爲五十姑、三字六音

以上の文字が『琉球国志略』から引用したものである。原文は「羣宮城 土音で羣が五十 [uʃl]、宮が訛 [pi]、城が五十姑 [uʃlku] と読み、三つの文字は六音節である。」という内容である。沖縄語辞典に「羣宮城 gusimia guʃiku」(si=ʃi ʃi=si) とあり、「五十訛五十姑」の音読に近い。

397. 姑達佳 譯爲久高

「久高は姑達佳の訳名である」という意味である。沖縄語辞典に「久高 kudaka」とあり、姑達佳 (kutatɕia) の発音に近い。「佳」は未だ口蓋化していない。

398. 津奇奴 譯爲津堅

沖縄語辞典に「津堅 ɕikiN」(ɕi=tʃi←tsi -N←nu) とある。津奇奴 [tsintɕʰinu] の発音に近い。「奇」は未だ口蓋化していない。

399. 巴麻 譯爲濱島

「土音」第66「巴麻 讀間」を参照する。

400. 伊計 譯爲池島

沖縄語辞典に「池間 (島の名) ʔicima 宮古」(ci=tʃi) とある。伊計 (itɕi) は池の発音である。

401. 姑米山 譯爲久米島

沖縄語辞典に「久米島 (島の名) kumizima 島尻」とある。姑米 [kumi] は久米の発音である。

402. 度那奇 譯曰度名喜島

沖縄語辞典に「渡名喜 (島の名) tunaci 島尻」(ci=tʃi) とある。度那奇 [tunatɕi] は渡名喜の発音。

403. 安根呢 譯曰栗国島

沖縄語辞典に「栗国 (島と名) ʔaguni 島尻」とある。安根呢 [ankenni] は栗国の発音 (第二音節の末に添音-nが有る)。

404. 椅山 譯曰伊江島

沖縄語辞典に「伊江島 (島の名) ʔiizima 国頭」とある。「椅 (i)」は伊江の発音で、山は使録で島の意味をもつ。

405. 葉壁山 土名伊平屋島

琉球人名地名辞典に「伊平屋・伊是名諸島 iheya」(he←be) とある。葉壁 [i ε bi] は伊平の発音である。

406. 東北八島 國人皆曰烏父世麻

奄美大島本島のことである。沖縄語辞典に「ʔuusima」(si=fʃi) と読む。烏父世麻 (ufuʃɭma) は奄美島の発音である。

407. 土噶喇 亦作度加喇 [tutɕiala] ↔ [tukara]

琉球音から見ると、「加」は未だ口蓋化しない。

408. 度姑 譯曰德島

沖縄語辞典に「徳之島 tukunusima」とある。度姑 [tuku] は「徳」の発音。

409. 奇𪛗 亦名鬼界

「𪛗」は界の異体字である。奇 [tɕi] は鬼 [ki] の発音で、未だ口蓋化していな

い。

410. 伊奇麻 譯曰伊喜間

伊奇麻 [itɕima] と伊喜 (iɕi) 間は両方とも音訳語である。沖縄語辞典に「池間 ʔicima 宮古」(ci=tɕi) とある。

411. 姑李麻 譯曰古裏間

姑李麻 [kulima] と古裏 (kuri) は両方とも音訳語である。沖縄語辞典に「來間 (島の名) kurima」 とある。

412. 烏巴麻 譯曰宇波間

烏巴麻 [upama] と宇波 [iɯpo] 間は両方とも音訳語である。沖縄語辞典に「大浜 ʔuhwama 八重山」(hwa←ba) とある。

413. 巴度麻 譯曰波渡間

巴度麻 [patuma] と波渡 [potu] 間は両方とも音訳語である。沖縄語辞典に「鳩間 (島の名) hatuma 八重山」(ha←ba) とある。

414. 由姑那呢 譯曰與那國

沖縄語辞典に「与那国 (島の名) junaguni 八重山」 とある。対音字「由姑那呢」 [iəukunani] の「姑」と「那」の位置が逆だった。

415. 達奇度奴 譯曰富武

「富武」は「竹富」の間違えである。沖縄語辞典に「竹富 dakiduN 八重山」 (-N←nu) とある。達奇度奴 [tatɕitunu] の「奇」は未だ口蓋化していない。

416. 姑呂世麻 譯爲久里島

「久里」は「黒」の間違えである。沖縄語辞典に「黒島 kurusima」(si=fɿ) とあり、姑呂世麻 [kuliɯslma] の発音に近い。

417. 阿喇姑斯古 譯爲新城

沖縄語辞典に「新城 (島の名) ʔaraguɕiku 八重山」(ɕi=si) とあり、阿喇姑斯古 [alakusʔku] の発音に近い。

418. 巴梯呂麻 譯曰波照間

沖縄語辞典に「波照間 hatiruma 八重山」(ha←ba) とあり、巴梯呂麻 [pat'iliɯma] の発音に近い。

卷二・土音

419. 册使 曰阿几噶加那子

中山伝信録に「老爺 安主」(antɕiɯ)、「大老爺 阿几噶那什、(atɕikanaɕl) とある。琉球語彙に「greatman (chinese Tajin 中国大人) Ajee」 とある。沖縄語辞典に「按司 ʔazi」(zi=dɕi)、「按司様 ʔaziganasii」(zi=dɕi si=fɿ) とある。この項

目は琉球入学見聞録が中山伝信録から引用したものだと考えられる。「加」は衍字だろう。

420. 國王曰倭急拿敖那 又曰哭泥華…又稱王曰御主加那志 又稱王曰兄嘉那實

(A) 倭急拿敖那 [uok (tɕ) inaauna] ← [uok (tʃ) ina:uauna (沖縄王)]。沖縄語辞典・陳侃使琉球録・蕭崇業使琉球録・中山伝信録なども「琉球国王 倭及（或いは急）那敖那」とある。沖縄語辞典に「沖縄 ?ucinaa」(?u←uo ci=tʃi←kinaa←naua)、「王 oo」(oo←uo: ↔uau) とある。「na」は中国語「王」の読方「uag」の「g」の部分から変化した発音だと考えられる。

(B) 哭泥華 [kunixua] ↔ [kuniuau (国王)]

沖縄語辞典に「国 kuni」とある。「王」の発音はAを参照する。

(C) 御主加那志 [ʔuʃiuganaʃi:]

「御主加那志」は対音字ではなく、琉球語形である。沖縄語辞典に「お主加那志 ?usjuganasii」(sj=ʃi si=ʃi) とある。

(D) 兄嘉那實 [ɕiugtɕianaʃl] ↔ [ʃiuNganaʃi (主加那志)]

(C)に似ている。違うのはまず「御」がなく、次はg-の影響を受け、第一音節の末に添音-Nがある。琉球音から見ると、第二対音字「嘉」の子音はまだk-と読み、口蓋化していない。

421. 妃曰倭男札喇 又曰御妃 女人稱妃曰倭男札喇加那子 又稱翁那嘉辣

(A) 倭男札喇 [uonantʃala] ↔ [uonaNdʒiara (按司の妻)]

琉球館訳語に「王妃 札喇」、蕭崇業使琉球録、中山伝信録に「王妃 倭男札喇」とある。沖縄語辞典に「-cara (接尾) 按司の意」(ca=tʃia)、「按司の妻 unazara」(u←uo za←dʒia) とある。dʒ-の影響で第二音節の末に添音-Nがある。

(B) 御妃 [o: Φi]

琉球語形である。沖縄語辞典に「御妃 oohwi」(hwi=Φi) とある。

(C) 倭男札喇加那子 [uonantʃalatɕianatsʔ] ↔ [uonaNdʒiaraganaʃi (按司の妻加那志)]

倭男札喇、加那子はそれぞれ(A)と420条(C)を参照する。

(D) 翁那嘉辣 [uɲnatɕiala] ↔ [uNnadʒiara (按司の妻)]

(A)に似ている。第二音節の添音がなく、そのかわり第一音節に添音が有る。

422. 琉球曰烏吉逆呀 [utɕiniia] ↔ [utʃina: (沖縄)]

沖縄語辞典に「沖縄 ucinaa」(ci=tʃi) とある。

427. 王子曰阿樓瓜 [aləukua] ↔ [o: nokua (王の子)]

王、子は421(A)、299を参照する。n-をl-で対音したのは安郷方言の影響だろう。

428. 公子曰呀吉哩 [iatɕili] ↔ [iatʃime: (ぼっちゃん)]

沖縄語辞典に「ぼっちゃん jacimee」(ci=tʃi) とある。第三音節の l- と m- はスレがある。

卷二・字母

429. 呼「春」為「花魯」二音

「春」を「花魯」二音で読む。第72春を参照する。

430. 合書「イロ」二字即為「色」字。

イロを書くこと即ち「色」である。

431. 泊讀土馬伊、則一字三音

第67泊を参照する。

432. 喜屋武讀作腔、則三字一音

第70喜屋武を参照する。

433. 君(エン) 空[kug]

コをエに誤った。

434. ザ 渣[tʃa]

435. ズ 凄[ts'i]

436. 字母・依魯花(いろは)：

- (1)イ 依 [i] (2)ロ 喽 [ləu] (安郷方言で lo と読む) (3)ハ 花 [xua] (4)ニ 義 [i] (安郷方言で li 或いは ni と読み、ni の可能性が高い) (5)木 夫 [fu] (6)ヘ 揮 [hwi] (7)ト 都 [tu] (8)チ 癡 [tʃl] (9)リ 利 [li] (10)ヌ 楼 [lo] (n-を l-で対音したのは安郷方言の影響) (11)ル 禄 [lu] (12)ヲ 烏 [u] (13)ワ 哇 [ua] (14)カ 喀 [k'a] (15)ヨ 攸 [iəu] (16)タ 他 [t'a] (17)レ 力 [li] (18)ソ 蘇 [su] (19)ツ 自 [tsʰ] (20)ネ 你 [ni] (21)ナ 那 [na] (22)ラ 喇 [ra] (23)ム 某 [məu] (24)ウ 無 [u] (25)キ 沂 [i] (26)ノ 奴 [nu] (27)オ 烏 [u] (28)ク 姑 [ku] (29)ヤ 耶 [ia] (30)マ 馬 [ma] (31)ケ 基 [ki] (まだ口蓋化していない) (32)フ 呼 [xu] (33) (ここに「コ 庫 [k'u]」と有るはずが、脱落した。) (34)エ 而 [ə] (35)テ 的 [ti] (36)ア 牙 [ɣa] (37)サ 沙 [sa] (安郷方言で sa と読む) (38)キ 基 [ki 或いは tʃi] (39)ユ 欲 [iɰ] (40)メ 霉 [mei] (41)ミ 米 [mi] (42)シ 實 [ʃl] (43)エ 意 [i] (44)ヒ 須 [ɕiɰ] (45)モ 莫 [mo] (46)セ 世 [ʃl] (47)ス 使 [ʃl] (48)ン 媽 [ma]

卷二・誦聲

437. 大學之道、在明明德、在觀民。

^{ダイアカノシツハ}
裂依牙喀奴米自韃 [taiigakanumits²ua (大学の道は)]

^{メトクアチラカニスルニアリ}
霉都姑牙癡喇喀義使禄義牙利 [meitukugats'llak'anis'llunigali (明道明らかにするにあり)]

^{タミガアラタニスルニアリ}
達米烏牙喇達義使禄義牙利 [tamiŋalataniš'llunigali (民をあなたにするにあり)]

対音字「裂」は「袋」の誤字である。

438. 在止於至善、知止而後有定。

^{シセンニトロマロニルニアリ}
實神義都魯馬魯義禄義牙利 [sɿsɿənnitulumalunilunigali (至善に止まるにあり)]

第五音節は「ト」の間違い、「にる」は衍字。

^{トルママルコトワシイテノチサタマルコトアリ}
都禄馬禄庫都烏實依梯奴癡沙達馬禄庫都牙利 [tulumaluk'utuus'lit'inuts'ɿsatamaluk'utugari(止まることを知いて後定まることあり)]

第二音節は「ト」の間違い。

439. 定而后能静、静而后能安。

^{サタマテシカルノチユクシツカラリ}
沙達馬梯志喀禄癡欲姑志即喀喇利 [satamat'isɿk'alunutsɿliækutɿɿtsik'anali (定めて而後能静なり)]

「喇」は na と対音するのは、安郷方言の影響。

^{シツカニシテシカルノチユクヤソシ}
志即喀義志梯志喀禄癡癡夭姑耶蘇志 [tsɿtsik'anitsɿt'itsɿk'alunuts'liaukuiasutsɿɿ (静かにして而後能安し)]

440. 安而后能慮、慮而后能得。

^{ヤソシテシカシテノチユクワモンハカリ}
耶蘇志梯志喀志梯奴癡夭姑烏孟花喀利 [iasutsɿt'itsɿk'atɿɿt'inutsɿliaukuumu əŋxuak'ali (安して而て後よくを物慮かり)]

^{ワモンハカテシカルノチユクイタリ}
烏孟花喀梯志喀禄癡癡夭姑依達利 (を物慮かって而後よく至り)]

441. 物有本末、事有終始。

^{ワホマツアリ ワサエタシアリ}
哇夫馬即牙利、哇沙意烏志牙利 [uafumagali, uasaiutsɿɿgali ([物] は本末あり、業終始あり)]

442. 知所先後、則近道免。

^{センクスルトクワシルトチハ}
神姑使禄都姑烏志禄都癡韃 [ɿəukusɿlutukutsɿlututs'lua (先後する所を知るときは)]

^{スラワチミツニチカシ}
使喇哇癡米即義其喀志 [ɿllauatsɿɿmitsinitɿik'atsɿɿ (則ち道に近し)]

443. 古之欲明明德於天下者、先治其國。

^{イニシノメトクテンカアチラカニホスルハ}
依義志奴霉都姑廳喀牙癡喇喀義夫使禄韃 [initsɿɿnumeitukut'igk'agats'ɿlak'anifuɿɿlluaa (古しの明德天下明らかに欲るは)]

サツソノクニヲサメ [satsisunukuniuſamei (先つ其の国治め)]

444. 欲治其國者、先齊其家。

ソノクニヲサメテホスルハ [sunukuniuſameit'ifuſlluua (其の国治めて欲りは)]

サツソノイト都奴 [satsisunuitutunu (先つ其の家齊のう)]

445. 欲齊其家者、先脩其身。

ソノイト都奴ホスルハ [sunuitutunufuſlluua (其の家齊のう欲るは)]

サツソノミヲサメム [satsisunumiūſameiməu (先つ其の身を脩めむ)]

446. 欲脩其身者、先正其心。

ソノミヲサメニトホスルハ [sunumiūſameinitufuſlluua (其の身を脩めにと欲るは)]

サツソノククルタタス [satsisunukukulutataſl (先つ其の心正す)]

447. 欲正其心者、先誠其意。

ソノククルタタスホスルハ [sunukukulutataſlfuſlluua (其の心正す欲るは)]

サツソノイカクノヲマクトニス [satsisunui'akumumak'utuniſl (先つ其の意かくのを誠にす)]

448. 欲誠其意者、先致其知。

ソノイカクノヲマクトニセテホスルハ [sunui'akunuumakutuniſlt'ifuſlluua (其の意かくのを誠にせて欲するは)]

サツソノチヲチハムノ [satsisunutſ'lutſ'luaməunu (先つ其の知を致はむの)]

449. 致知在格物、物格而後知至。

チヲムリハムノコトニイタルニアリ [tſ'luəuuliuaməunuk'utuniitalunigali (知をむりは物事に格るにあり)]

ムノコトイタルテシカルヲノチナイタル [məunuk'utuitalt'is'lk'aluuunutſ'ltſlitalu (物事格るてしかるのをを後知至る)]

一つの「鳥」は衍字である。

450. 知至而後意誠、意誠而後心正。

チイタテシカルノチイカクノマクトアリ [tſ'litat'itſ'lk'alunutſlik'akunumakutugali (知至って而を後意かくの誠あり)]

イカクノマクトアリシカルヲノチナククルタタス [ik'akunumakutugaliſ'lk'aluuunutſ'lkukulutataſl (意かくの誠あり而の後心正す)]

451. 心正而後身脩、身脩而後家齊。

ククルタタシテシカルヲノチミヲサマル [kukulutatataſlt'itſ'lk'aluuunutſ'lmiaſamalu (心正して而後身脩まる)]

ミヲサマテシカルヲノチイトノテ [miaſamat'itſ'lk'aluuunutſlitutunut'i (身脩

まって而後家齊のって)]

452. 家齊而後國治、國治而後天下平。

^{イト ト ノ テ シ カ ル ツ ノ ナ ク ニ ヲ サ マ ル}
依都都奴梯志喀禄烏奴癡姑義烏沙馬禄 [itutunut'its'lk'aluunuts'lkuniusamalu

(家齊のって而後国治まる)]

^{ク ニ ヲ サ マ テ シ カ ル ツ ノ ナ テン カ タ イ ラ カ}
姑義烏沙馬梯志喀禄烏奴癡 廳 喀達依喇喀 [kuniusamat'its'lk'aluunuts'lt'igk'atailak'a

(国治まって而後天下平らか)]

453. 自天子以至於庶人、壹是皆以脩身爲本。

^{テン シ ユ リ ム テ シ ツ ニ ニ イ タ ル}
廳志天利某梯志烏義義依達禄 [t'igts'liəuliməut'is'ɭuniniitalu (天子より持って庶

人に至る)]

^{イ シ ミ ナ ミ ヲ サ マ ム ル ツ ム ツ ム ト ト ス}
依志米那米烏沙馬某禄烏某烏某都都使 [its'ɭminamiusamaməuluuəuməutututs'ɭ

(いし皆身脩むるをむを本爲す)]

454. 其本亂而末治者否矣。

^{ソ ノ ム ト ミ タ レ テ シ カ シ テ ス ヲ サ マ ル ノ ハ ア ラ レ}
蘇奴某都米達力梯志喀志梯使烏沙馬禄奴鞭牙喇力 [sunuməutumitalit'its'lk'atsit'is

ɭusamalunuuaɣalali (其の本乱れて而して未治まるのは有られ)]

455. 其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。

^{ソ ノ ア ツ ヲ ス ル ト カ ノ ム ノ ヲ ス ツ シ テ}
蘇奴牙即烏使禄都喀奴某奴烏使烏志梯 [sunuɣatsius'ɭlutuk'anuməunuus'ɭuts'lt'i

(其の厚をする所者薄をして)]

^{シ カ シ テ ソ ノ ヲ ス ヲ ス ル ト カ ノ ム ノ ア キ ハ}
志喀志梯蘇奴烏使烏禄都喀奴某奴牙基鞭 [ts'lk'ats'lt'isunuus'ɭus'ɭrutuk'anum

əunugatɕiua (而して其の薄うする所者厚は)]

^{ク レ ア ラ レ タ}
姑力牙喇力達 [kuligalalita (これ有られた)]

456. 子曰、學而時習之、不亦說乎。

^{セ ノ ノ ユ ハ ク}
世奴奴王鞭姑 [s'ɭnunuiəuaku (子のの曰く)]

^{マ ナ シ テ シ カ シ テ ツ キ ク リ ヲ ナ ラ フ}
馬那恩梯志喀志梯吐基姑利烏那喇窩 [mana (e) nt'its'lk'ats'lt'it'utɕikuliunalauo

(学んで而して時これを習おう)]

^{マ タ ヨ ロ コ ハ シ カ ツ ザ ラ シ ヤ}
馬達似魯庫鞭志喀烏渣喇恩耶 [mataiəuluk'uat's'lk'autsala (e) nia (また悦こば

しかをざらんや)]

457. 有朋自遠方來、不亦樂乎？

^{ア リ ト モ イ ン ボ ヲ リ キ タ ロ}
牙利吐磨因波攸利基達樓 [ɣalit'umoinpoiəulitɕitaləu (有り友達方より來たる)]

^{マ タ ツ ノ マ ザ ラ シ ヤ}
馬達達奴馬渣喇恩耶 [matatanumat'sala (e) nia (また樂まざらんや)]

458. 人不知而不愠、不亦君子乎？

^{ヒ ト シ ラ ズ}
虚兜實喇凄 [ɕiəutəus'ɭlats'i (人知らず)]

^{シ カ ル ツ イ カ ラ ズ}
實喀禄烏依喀喇凄 [s'lk'aluuk'alats'i (而るう愠らず)]

^{マ タ コ ン セ ザ ラ シ ヤ}
馬達空世渣喇恩耶 [matak'ugs'ɭtsala (e) nia (また君子ざらんや)]

以上437から455までは中国儒教経典『大学』に最初部分の琉球訓読で、456から458までは『論語』に有る節の琉球訓読である。原文は「本文・字の訓読・合わせて仮名の読み方（総読云）」の順となっている。対音字と片仮名は「総読云」から写したものである。対音（国際音記）の後ろに有る解読は「字の訓読」部分を参考にしながら書いたものである。

「誦聲」は中国古典を琉球語訓読にして唯一な中国史料で、琉球の訓読史の研究に重要な価値が有る。「誦聲」に使われた仮名発音は「字母」とほぼ一致する。その発音は安郷方言の影響が大きい。例えば志（シ）渣（ザ）沙（サ）使（ス）癡（チ）など北京音でそり舌音を読む字は安郷方言で ts^2 、 tsA 、 sa 、 s^2 、 ts'^2 と読む可能性が大きい。ほかに「義」の子音は n 或いは口蓋化鼻音、「牙」は $ŋa$ 或いは $ʔa$ と読むべき、比較的に古い発音である。